

古代中国仏教寺院における堂内造像の配置

——近年寺院址出土の新資料を手がかりとして——

王 衛 明

はじめに

中国では、石室構造の石窟寺と木造建築の仏寺という兩種形態の仏教寺院が、魏晉・南北朝時期においてはほぼ同時に盛んに造営されたのであった。周知のように、中原地域に石窟寺院の遺構が数多く現存するに對し、完全な姿で残る当時の木造の仏寺遺構は皆無である。当然ながら、その仏堂内に莊嚴の一部とした仏像は、如何なる形で配置されていたかについては、現存する石窟寺院の内部状況から多少推測することができるものの、それに対応する木造寺院に関する資料が稀少のため、実物上で、中原地域に造営された仏堂内の仏像配置の實態を解明することが極めて困難である。

ところが、新中国成立した間もなく、四川省成都の万仏寺址には二百件あまりの南朝時期の石造像が発見され、⁽¹⁾河北省曲陽修德寺遺址から二千件以上の北朝時期の石刻造像も続々と発掘された。⁽²⁾これら廃寺址の地中に埋もれていた数々の仏教造像を目にすることを契機に、南北朝時期における仏教美術発展の様相を把握することができたと同時に、その寺院内部における堂内の莊嚴や、仏像配置の状況に関する問題提起を行う機縁も訪

れたのである。そして近年、一つ注目される仏教考古学の調査成果として、洛陽郊外にある北魏永寧寺塔基の発掘や、出土仏塑像の復原によって、堂塔内の莊嚴の実態を推定しうる材料が現われており、また、一九八〇年代以降、山東省各地の寺院遺址に、南北朝、隋唐期に制作された様々な等身大の如来・菩薩形の単独像や、造像龕などの遺物も大量に出土された。こうした一連の出土仏像は単なる遊離的な作品であるのみならず、あくまで仏堂内に奉納する供養品として制作されたもので、その中には個々の制作主題に規定された功能的な配置原理や、寺院堂内の莊嚴形態に深く関わるものであることは言うまでもないであろう。

この問題についての専門的研究はこれまでに殆どなされていないが、それに関連する中国早期の伽藍配置に関する考察は、日本では早くから田中豊蔵、村田治郎両氏を始とする初期の試みがなされていて、また近年になって、百橋明穂氏は「古代寺院における堂内壁画莊嚴の系譜」と題する論文を発表され、日本各地の廃寺址から出土された押出磚仏や、塑像残片などの実物資料を用いて、日本における初期仏堂内の壁画莊嚴の実態を裏付ける示唆に富んだ考察を展開されたのである。⁽⁶⁾中国でも、こうした不足面を補う新発見資料に基づいて、ようやく散発的な論考が学術誌に出されており、ことに宿白と傅嘉年両氏は、中国早期仏寺の形制、または唐宋時期における仏堂内の仏像配置原理などの諸問題を文献史料と考古学資料の両面から検討が行われるに及んで、事実関係が一定の程度まで確認されていた。⁽⁷⁾

こうした近年に公表された発掘遺品から得られた情報や学界の研究成果に基づき、当時の仏寺の構造、並びに堂内の造像配置が如何なる形態であったかを考え、寺院内の莊嚴の様相を少しでも明らかにすることによって、中原地域を中心とする初期伽藍の具体像を浮かび上がらせることが本稿の目的である。

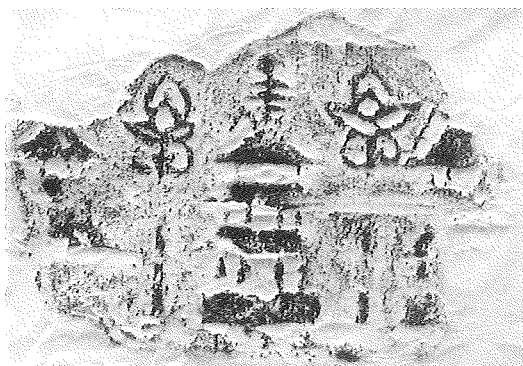
一 既存の資料にみえる初期の仏寺構造と造像配置

中国では仏寺の造営と仏像の制作を盛んに行った時期の到来は、後漢末から三国時代にかけての一大動乱期の間であったと考えられるが、当時の実情に關しては零散な文献記載以外には殆ど知る余地がない。この時期に仏寺の起源についての議論は、本稿の論旨に少しく離れるので略筆するが、仏像を安置する初期仏殿の形式などの諸点に限って言及しておく。

中原地域における仏教伝来期の寺院実態を辿る最も基本的史料としては、『三国志』卷四九呉書・劉繇伝並びに『後漢書』卷七三陶謙伝が挙げられる。それによれば、

笮融者、丹陽人、初聚衆数百、往依徐州牧陶謙。謙使督廣陵、彭城運漕、遂放縱擅殺、坐断三郡委輸以自入。乃起大浮屠祠、以銅為人、黄金塗身、衣以錦采、垂銅槃九重、下为重楼閣道、可容三千餘人。

とある。⁽⁸⁾この記事から考えられることは、後漢献帝の初平四年(一九三)、丹陽人の笮融が発願した最初の仏寺はもともと「浮屠祠」と呼ばれるもので、その建物の主体部構成は「重楼」という中国風の多重の木塔と、それに付帯する回廊式の堂閣という、謂る一塔一仏殿の配置であったと判断されよう。⁽⁹⁾「銅槃九重」とは重楼の屋根の上に配置された相輪のことを指すもので、この重楼は外観から見て、重層の塔形の姿となることが想像される。また「閣道」とは廻廊のことで、仏寺全体は層塔式の堂閣を中心とした配置となり、その堂閣の周囲に廻廊をめぐらした形式であろう。このように重楼、堂閣、閣道の並ぶ本格的な中国式仏寺の出現はいうまでもなく、その堂閣内部に安置した「銅を持つて人を作り、黄金を身に塗り、衣するに錦采をもつてす」といった青銅鍍金の仏像を安置する供養行為は重要な目的とするものである。従って、堂閣の内部に「可容三千人」



図一 仏塔画像磚拓本（東漢晩期）

線に置かれるものであると解理してよからう。

それと関連して、この時期の寺院の様相を考えさせる出土遺物として、四川什邡県皂角郷白果村にある後漢碑室墓で発見された仏塔画像磚（四川省博物館蔵）は、三層樓閣式の仏塔を中心に、左右両側には蓮華を挟んで仏殿を配し、徐州仏寺の一塔一仏殿の配置と類似する形態となっている。（図一）また当時の仏像配置の具体像を窺わせる資料として、江蘇南京の三国時期の呉国墓葬に検出された黒釉樓閣仏像陶罐（中国歴史博物館蔵）では、両層の屋型樓閣の外側上下層にそれぞれ十七尊の仏像を一周巡らして、仏像は結跏趺坐の姿で、両手を胸前に結んで禅定印の形となり、身後に大きな円型光背を持つことも最も特徴的である。更に、上層の寄棟式仏

とする広大な空間を設ける形態は仏像を展観するよりも、「課讀佛經」の信者達を可能なかぎり収容して法要を営むことが、本来の講堂としての目的にふさわしいものであろう。また、竿融の作った仏像について注目すべきのは、塗金の金銅像の表面に錦采を着せた形態が、漢墓の副葬品にみられる裸身の俑に錦采の服を着せる一種の偶人のようなもので、このような裸体か半裸体に近い肌を表わす仏の姿が、礼拝像として当時の漢民族の社会通念上に背くもので、おそらく両肩から全身を覆う通肩か、あるいは、右肩を肌ぬぎにする偏袒右肩となる如来像や菩薩像のような形であつたと考えられる⁽¹⁾。いずれにしても、この像の着衣の不自然さから、仏教初伝期の人々の仏像に対する様々な考え方が露呈されていて、この「錦采」を着せられた竿融の仏像形式は、やはり仏教の中国に滲透する時点に理解された「休屠金人」形の延長



図二 黒釉樓閣仏像陶罐
(三国・呉)

殿の内部にも本尊のような仏像が置かれ、両側の扉にはそれぞれ脇侍像も配されている。このように仏殿の外側に多数の円型光背を負う単独の造像が並列して安置される様相は、後に魏晉時期に盛んに行われた仏堂内外の仏像配置方式に対して、何らかの影響を及した可能性が充分に考えられるのである。(図二)

やや時代を下げて、梁の僧祐『弘明集』に輯録された牟子『理惑論』には、魏晉の都城にある白馬寺に関する記事があり、それによれば、

(孝明皇帝)時於洛陽城西雍門外起佛寺、於其壁画千乘万騎、繞塔三市、又於南宮清凉台、及開陽城門上作佛像。明帝存時、預修壽陵曰顯節、亦於其上作佛图像。

と伝えられる。⁽¹²⁾この白馬寺の「又於其壁画千乘万騎、繞塔三市」という内容は堂内莊嚴に関する文献上の初見である。そして、『魏書・釈老志』にも白馬寺に関するややまとまった記事がみえ、それを記せば、

自洛中構白馬寺、盛世佛图、画跡亦妙、為四方形。凡宮塔制度、猶依天竺旧状而重構之。従一級至三、五、七、九、世人相承、謂之「浮图」或云「佛图」。晋世、洛中佛图有四十二所矣。

となる。文中に示された「佛图」とは仏の図像ではなく、塔廟やその中に配置された仏像の総称であり、⁽¹³⁾「画跡」は仏殿に施された彩絵や壁画のことを指すもので、即ち、莊嚴する行為そのもの、という意味である。当時、白馬寺の堂塔内部には既に造像の配置や堂内の壁画莊嚴が行われており、また仏寺の形態は「為四方式」をなした方形の構成となり、その中に樓閣式の仏塔は九層建てのものであったと考えられる。

北魏の道武帝の時代には初めて京城の平城において寺院の造営が行われたが、『魏書・釈老志』には、

天興元年（三九八）下詔曰（中略）、於京城建飾容範、修整宮舍、令信向之徒、有所居止。是歲、始作五級佛図、耆闍崛山及須彌山殿、加以續飾。別構講堂、禪堂及沙門座、莫不嚴具焉。

と伝えられ、天興元年（三九八）に、北魏の平城では道武帝の詔を受け、「建飾容範」といった仏像の姿を作り飾るために、北魏王室の最初の寺院とした五級大寺が造営され、仏像の配置が寺域内の五級塔、耆闍崛山殿、須彌山殿のうちいずれかの堂内に行われた。さらに寺の配殿として講堂、禪堂、沙門座を備えた講經・誦禪の場所も設けている。この仏寺の配置は、徐州浮屠寺の伝統を受け継ぎながらも、西域、涼州から飛躍的に進んだ仏寺造営の手法を積極的に導入されたことが窺われるのである。そして、興光元年（四五四）の秋、北魏皇室は同じ場所ですぐに太祖以下の五帝のために新たな仏像を作り、その詳細について正史には、

興光元年（四五四）秋、敕有司於五級大寺内、為太祖以下五帝鑄釈迦立像五、各長一丈六尺、都用赤金二十五万斤。

と伝えられている。⁽¹⁴⁾ それによつて、この五級大寺の殿内には、複数の大型独尊の金銅製の釈迦立像が配置せられていたことが知られる。また、『魏書・釈老志』には、こうした五層の樓塔の殿内空間に多尊の仏像により莊嚴する北魏京城の造寺奉仏の実情について、

其歲、顯祖獻文帝即位、和平六年（四六五）、高祖誕載、於時起永寧寺、構七級浮図、高三百餘尺、基架博敞、為天下第一。又於天宮寺、造釈迦立像、高四十三尺、用赤金十万斤、黄金六百斤。皇興中（四六七）四七

一、又構三級石佛図、檼棟楣楹、上下重結、大小皆石、高十丈。鎮固巧密、為京華壯觀。と記され、この時期には雲岡の「曇曜五窟」を建設する最中であるものの、城内の「三百餘尺」の高さを持つ永寧寺の七級大塔や、天宮寺に配置された大型の金銅製釈迦立像がいち早く本格的に作られたことから、五世

紀中葉に中原北方の奉仏造寺の伝統が最も厚かったことは窺われるのである。

以上の史料からはほぼ確認できることは、まず、北方中原において、崇仏を象徴とする仏塔が伽藍配置の中心として、塔頂に相輪を配するのまただの飾りつけではなく、寺院のシンボルとして重要な意味を持つものである。次に、早期の史料には、仏寺を「浮屠祠」と呼ばれ、のちに塔廟と仏像を「浮屠」や「仏図」と通称する。

また、初期の寺院では、樓塔の層数によって寺名とする例が多く見られ、例えば晋陽の「三級寺」⁽¹⁵⁾、平城の「五級大寺」または長安城内にある「五重寺」などの名称は、寺の初期の形制を想像させるものとして留意すべきであろう。堂内に配置された本尊として、徐州の浮屠寺の堂内に安置された「黄金塗像、衣以錦綵」と伝えられる金銅製で、表面に錦繡を纏った漢民族化された仏像は、後漢末期から濫觴となり、北魏の平城時代に至ってもほぼ類似した伝統的手法で作られており、単独像の釈迦如来本尊として堂内に安置されることが多い。また周囲の壁画や、堂内外の空間を荘厳するについては、雲岡石窟内部に彩絵された様相や、洛陽永寧寺跡出土の壁画残片を考え併せると、一定程度の水準に達していたことが推測されるのである。

北魏が洛陽遷都後の熙平元年(五一六)、靈太后の発願で造営された洛陽永寧寺は、近年の発掘によつて、その遺址に大量の泥製仏像や、建築裝飾部品などの寺院関係遺物が発見されたことは周知の通りであるが、こゝでまず文献史料の記載にかかわる諸問題を考えておこう。

楊衒之の『洛陽伽藍記』巻一には永寧寺の詳細について、これまでの史書に例を見ない具体的な記事があり、それを建物配置の順で摘出すると、次の通りとなる。⁽¹⁷⁾

仏塔——中有九層浮屠一所、架木為之、举高九十丈、有利、復高十丈、合去地一千尺。浮屠有九級、角々皆懸金鐸、合上下有百二十鐸。浮図有四面、面有三戸六牕、戸皆朱漆。扉上有五行金釘、合有五千四百枚。復有金鑽鋪首。

相輪——刹上有金宝瓶、容二十五石。宝瓶下有承露金盤三十重、周匝皆垂金鐸、復有鐵鐃四道、引刹向浮図。

仏殿——浮屠北有佛殿一所、形如太極殿。

仏像——中有丈八金像一軀、中長金像十軀、繡珠像三軀、金織成像五軀、玉像兩軀、作功奇巧、冠絶當世。

僧房樓観——千餘間、雕梁粉壁、青纒綺疏、外国所獻經像、皆在此寺。

寺院牆——皆施短椽、以瓦覆之、若今宮牆也。四面各開一門。

門樓——南門樓三重、通三閣道、去地二十丈、形製似今端門。図以雲氣、画彩僊靈、綺錢青鏤、輝赫麗華。

拱門有四力士、四獅子、飾以金銀、加之珠玉。東西兩門亦皆如之、所可異者、唯樓兩重。北門一道不施屋、似鳥頭門。

以上の記事からわかるように、永寧寺の寺域内の配置は、南から中軸線に木造九層の木塔と、その北側に皇宮太極殿の形に倣った仏殿が建てられ、仏塔は仏殿の前に位置することから、この時期の伽藍配置に仏塔がなお仏殿より重視されていたことが示されている。この特徴は、『水経注』中の永寧寺の記事に「浮図(中略)取法代都七級、而又高廣之」と記されているように、代都平城の「構七級浮図」といった多級仏塔を中心とした配置の伝統を踏襲して発展してきたものと考えられる。また仏殿内には、巨大な丈八尺の金銅仏像を中心として、その周囲に十身の等身大の金銅像、三身繡仏像、五身の錦采金像及び玉像を含む二十身に及ぶ様々な素材で作られた仏像が配置されており、その堂内の造像構成はおそらくこれまでに中原地域において最も完成度の高いものであったと想像される。そして、この一塔一仏殿の周囲に「僧房樓観一千餘間」といった配置形式に關しては、史料の不足で知る余地がないが、ただその僧房樓観の内部に安置された外国伝来の経像や、門樓に描かれた彩絵裝飾及び拱門兩側に配された金銀と珠玉で飾った四力士や四獅子などの記述から見ると、永寧寺

塔殿における莊嚴の形態が、前代の平城時期より飛躍的に進んでいたことが事実のように思われるのである。

ここまで述べたように、既存の史料と永寧寺塔址の調査により三国、魏晉及び北魏平城時期において、中原地域の仏寺の配置は主に四天王寺式のように前塔後仏殿の形式をなすものであり、尊像の配置は主に仏塔の内部を中心に行われたのである。ところが、北魏の洛陽遷都後、京洛周辺の寺院は徐々に無塔の一仏堂のみの配置に移行していく傾向が見られ、仏像配置の重点も樓閣から仏殿へ移動し、遂に仏殿が仏像供養の中心となったのである。この無塔式の伽藍配置を出現させる原動力は当時、官僚貴族が相次いで邸宅を棄捨して寺にする謂る「捨宅為寺」の現象を直接に反映したものと考えられるが、その個人的な奉仏造寺の実情について、『洛陽伽藍記』巻一建中寺の条に、

建中寺、普泰元年（五三二）、尚書令樂平王爾朱世隆所立也。本是閹官司空劉騰宅。屋宇奢侈、梁棟踰制、一里之間、廊廡充溢。（中略）以前廳為佛殿、後堂為講堂。

と伝えている。また同書巻一の尼寺景樂寺の条には、

景樂寺、太傅清河文獻王懌所立也（中略）。有佛殿一所、像輦在焉。彫刻巧妙、冠絶一時。堂廡周環、曲房連接、輕條拂戸、花藥被庭。

とある。以上の両寺はいずれも創立者の身分が高く、北魏末の大官寺として知られるが、また両寺ともに「前廳為佛殿、後堂為講堂」といった一仏殿のみの配置で、その堂内には前廳と後堂に分けられ、それぞれ仏像を安置する場所と講經の空間が設けられる。勿論、仏堂内の正面壇上には自由に仏像を安置する空間を確保することをも主要目的とするのであろう。このように無塔式伽藍配置の事例は、『洛陽伽藍記』に記録された四十三箇所寺院のうち、三重塔、五重塔を配する寺院とした瑤光寺、胡統寺、秦太上君寺、景明寺、秦太上公寺、冲覺寺、宣忠寺、王典御寺、宝光寺、融覺寺を数える以外には、すべて無塔式の一仏殿の配置であり、この状

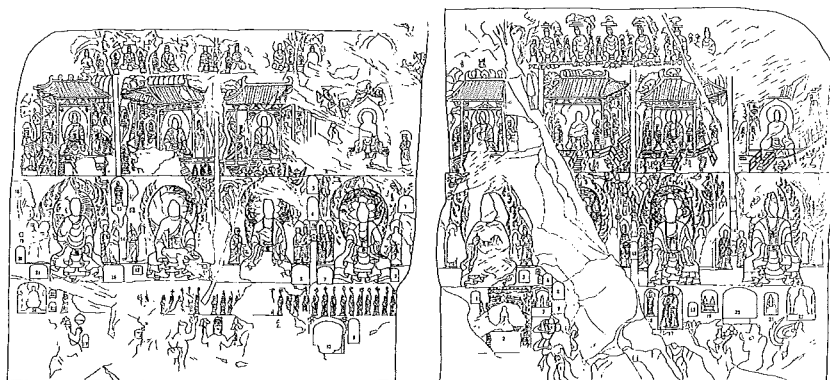


図三 龍門石窟古陽洞北壁第二層維摩像と文殊像（描起し図）

況を考えてみると、この時期において、個人的な意向を強く反映した私宅寺院には、その仏堂内部に組織的に多数の経像が盛んに配置されるようになったことは確かである。

しかし、上述した仏殿内に配置された仏像及び堂内荘嚴が如何なる形であつたかについては、その実態を知る余地がないが、北魏時期に作られた石窟寺院の造像裝飾の中にもその形象的資料が多少残されている。その個人的仏寺の姿を窺う例として、龍門石窟古陽洞北壁第二層第三龕に刻まれた維摩図は、文殊と維摩がいずれも仏座帳の中に坐し、周囲には多くの礼拝僧に囲まれ、仏堂内の供養場面を視覚的に表現している。〔図三〕また、近年公表された龍門石窟の南端に位置する北魏期の路洞には、南壁と北壁にそれぞれ三軒と四軒の仏殿が浮彫で描かれており、仏殿はすべて半側面を構図し、入母屋形の屋頂で、そして屋檐の下に北魏の時代特徴を示す人字型の斗拱や、欄干と階段を配している。仏殿内には禪定印を結んだ本尊が結趺坐し、その左右側には数尊の光背を負う脇侍菩薩が配列され、また仏堂の周囲には菩提樹や花木が見られる。この図像は前述した北魏洛陽時代の私宅寺院内部の仏殿、並びにその中に配置する仏像を具体的に知る素材として注目すべきものであろう。〔図四〕

次に、山東地域に目を向けると、前秦苻堅の皇始元年（三五二）、仏



図四 龍門路洞南壁と北壁仏殿図（描起し図）

図澄の弟子である釈僧朗は、泰山西北の麓に規模宏大を極めた精舎を施入建立し、その様子については、唐の道宣『続高僧伝』に、

齊州泰山神通寺、即南燕主慕容徳為僧朗禪師之所立也。燕王以三畛民調用給於朗、並散宮寺。上下諸院十有餘所、長廊延袤千有餘間。（中略）寺立以來四百餘載、佛像鮮瑩色如新造。

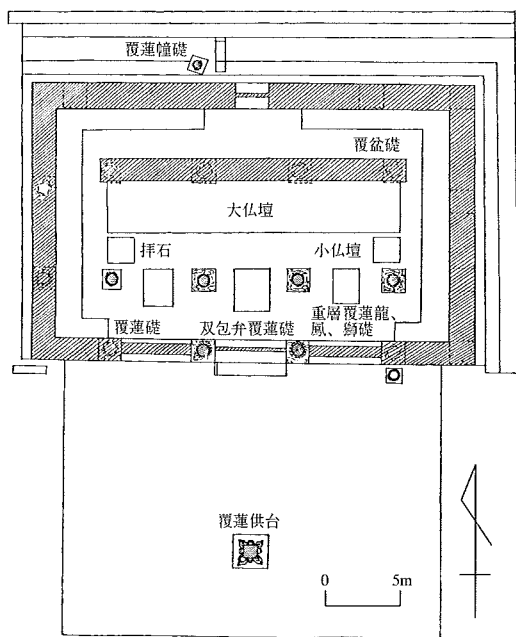
と伝えている。⁽²¹⁾ 右記の内容を字面通りに受け取れば、この泰山神通寺の配置は、当時の華北地域において最大規模の多殿型の伽藍構成であったことに違いない。またこの寺に施入した多くの仏像について、同じく『続高僧伝』に、

（釈僧意）元魏中、住太山朗公谷寺（中略）、寺有高驪像、相国像、胡国像、女国像、呉国像、崑崙像、岱京像。如此七像並是金銅、俱陳寺堂。

と記されている。⁽²²⁾ それによつて、この朗公谷寺が中国周辺諸国から伝わった各種の金銅仏像を安置するには充分な堂内配置の知識を持つていたことを窺わせるのである。現在、山東省済南市南に位置する神通寺遺址では、四門塔、龍虎塔、墓塔林、千仏崖石窟及び碑碣など寺院域内に附属する遺物がなお現存しているが、一九八四年、同寺院の殿堂遺址に対して発掘調査が行われ、この大殿遺址を発掘する際、粘土で作られた如来、羅漢、天王、力士及び世俗人物など

仏壇の前にも護法天王像一組も左右に配置される形態は、少なくとも明代まで溯って残存していたと判断されるのである。それによって、この仏殿遺跡はもとと神通寺の金堂、即ち仏寺の中心となる大雄宝殿の遺構の所在であろうと推測されている。⁽²⁴⁾〔図五〕いづれにせよ、山東地域に開かれた最古の仏寺であった僧朗の朗公寺跡に出土した大量の遺物は、この地域の早期の寺院規模や堂内の仏像配置を考える上で貴重な材料となったのである。

その一方、南北朝時期の江南地域の仏寺造営の状況を触れてみると、慧皎『高僧伝』巻五釈道安伝には、西晋(二六五―三一六)末頃、道安が襄陽の檀溪水に施入した檀溪寺に関する内容は仏寺造営の最早の記録である。



図五 神通寺殿堂遺址平面図

の塑像残断が同時に出土した。⁽²⁵⁾その造像の制作年代は晋、南北朝から隋唐、また金元時期まで溯ることが確認されている。また調査された大殿遺址の原型が仏寺初創期のものかどうかについては、殿内配置の造像がすべて損壊しているため、未だ詳かにしないが、寺域内に残存されている明の成化十年(二四八七)、正徳四年(二五〇九)の功德碑に「有大殿二、一以供佛及十八羅漢二十諸天、一以供五百羅漢」と伝える記事を併せてみると、大殿の仏壇では本尊と脇侍菩薩及び諸天像などを中心に配置し、凹字型の仏壇には十八羅漢、また

それを徴すると、

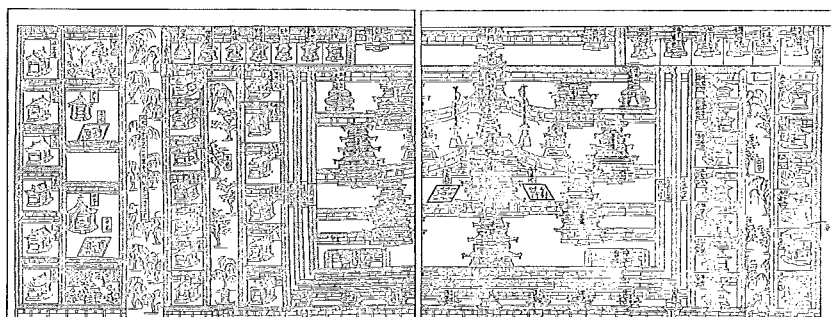
〔道〕安以白馬寺狹、乃更立寺、名曰檀溪、即清河張殷宅也。大富長者、並加贊助。建塔五層、起房四百。涼州刺史楊弘忠送銅万斤、擬為承露盤。〔中略〕於是衆共抽捨、助成佛像、光相丈六、神好明著、每夕放光、徹照堂殿。〔中略〕苻堅〔在位三五七―三八五〕遣使送外国金箔倚像、高七尺、又金坐像、結珠弥勒像、金縷繡像、織成像各一尊。每講會法聚、輒羅列尊像、布置幢幡、珠珮送暉、煙華亂發。

とある。⁽²⁵⁾それによつて、道安の発願したこの檀溪寺は徐州屠浮寺と同様に一仏塔の配置であつたと同時に、四百軒の建物を寺域に並置して極めて広大な規模を持つていたことが分かる。また、外国将来の鍍金坐像や弥勒像、繡像、織成像などの諸尊像は、本尊と共に固定して陳設するのではなく、法会に應じて幡帳による殿内の莊嚴に伴い自由に配置する形態が、この時期に仏像配置の手法を窺う興味深い記録であろう。また、襄陽と隣接する荊州地域にも、南朝時代に相次いで衆目を集める大規模な地方寺院が出現した。道宣『律相感通録』には、荊州の河東寺については、

自晋宋齐梁陳代、僧徒常有数万人。〔中略〕寺房五重、並皆七架、別院大小合有十所、般若、方等二院莊嚴最勝、夏別常有千人。寺中屋宇及四周廊廡等減一万間。寺開三門、兩重七間、兩廡殿宇横没、並不重安、約準地数、取其久固。

と伝えられ、⁽²⁶⁾この寺は五重の樓閣と七級の仏塔が相互に連接する構造で、回廊に囲まれる寺域内に十箇所の別院が設けられ、また般若と方等の兩別院に行われた莊嚴が最も盛んであつたことが分る。この寺の建物規模と配置形態は、前述した山東泰山の朗公寺と極めて類似するもので、南北朝の南朝支配地域には、既に寺院配置の發展基盤が整つていたことを示すものである。

続いて、南朝の梁武帝蕭衍〔在位五〇二―五四九〕治世の四十八年の間には、都の建康に「都邑大寺七百餘所、



図六 道宣『関中創立戒壇図経並序』附図・仏寺図

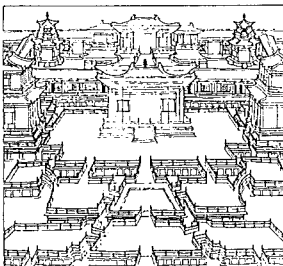
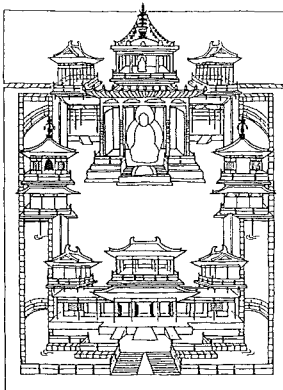
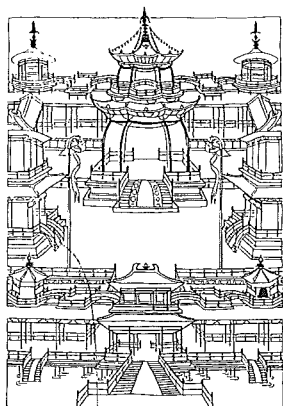
僧尼講衆常有万人」とされた大規模な興寺造像事業が行われ、そのうち、武帝が父母を追福するために建康西南の鐘山で造営した大愛敬寺と大智度寺について、道宣『続高僧伝』巻一宝唱伝は、次のように述べている。

（武帝）為太祖文皇於鐘山北澗建大愛敬寺。（中略）結構伽藍同尊園寢、經堂彫麗奄若天宮。中院之去大門延袤七里、廊廡相架簷霤臨屬、旁置三十六院、皆設池台、周宇環繞、千有餘僧四事供給。中院正殿有栴檀像、举高丈八。（中略）（武帝）帝寺中龍淵別殿、造金銅像举高丈八、躬伸供養。又為獻太后於青溪西岸建陽城門路東、起大智度寺。（中略）殿堂宏壯、宝塔七層、房廊周樓華果間發。正殿亦造丈八金像。

また、梁の皇室との関わりの深い大通元年（五二七）に建立した同泰寺の伽藍配置について、『建康実録』巻十七の割注に顧野王『輿地志』を徵引する内容がみえ、併せて記せば次の通りである。

浮図九層、大殿六所、小殿及堂十餘所。宮各像日月之形、禪窟禪房山林之内、東西般若台各三層、築山構隴、亘在西北、栢殿在其中。東西有璇璣殿、殿外積石種樹為山、有蓋天儀、激水隨滴而轉。

以上の記事は南朝盛期の仏寺造営の規模を考える上で最も基本的な参考依据となっているが、しかし、建康周辺の南朝仏教関係遺跡として、南京東郊にある摂山棲霞寺石窟に残存する後世の補作を受けた数龕の石造如来、菩薩像以外には、以上の文献史料を実証する遺例が殆ど存在しないため、

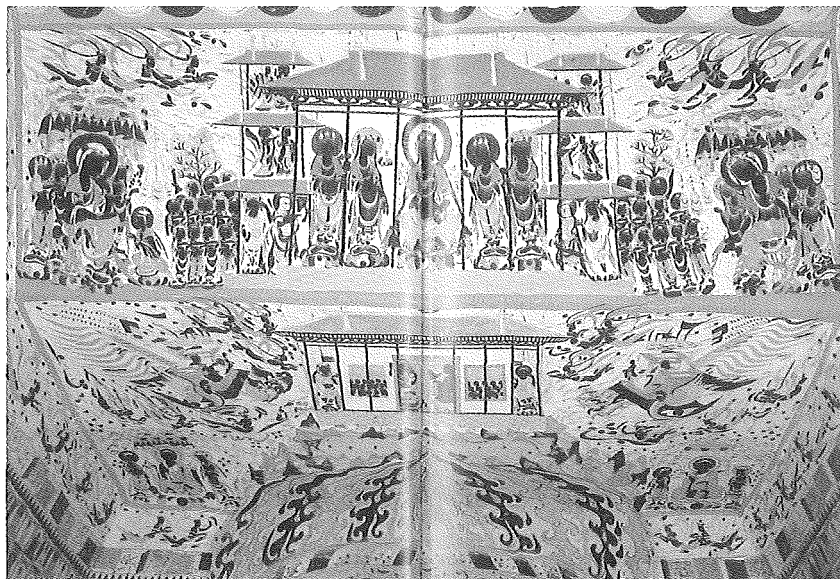


図七 敦煌莫高窟第三六一窟・
仏寺図(上・中)、第八五窟仏
寺図(下) (描起し図)

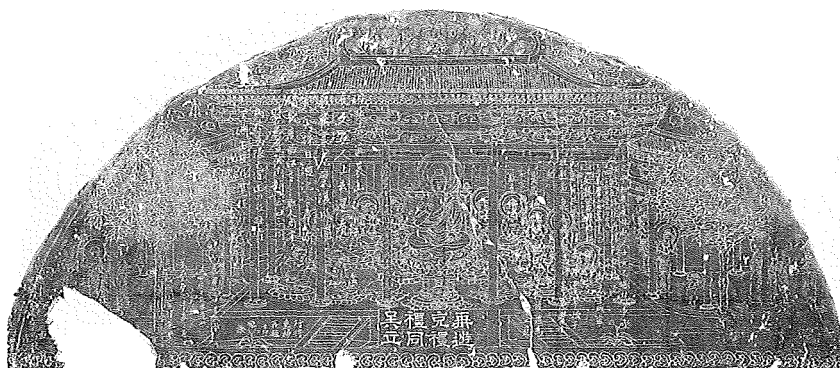
梁武帝期に造営された極めて壮麗な一塔多院式の伽藍配置の実態は未だ明らかにされていない。そこで、唐代の道宣が撰した『関中創立戒壇図経並序』中に掲載した戒壇図と称する仏寺の白描図像を見てみると、画面には、中軸部の主院となる中院は寺院構成の主体部となり、伽藍の中軸線上に前殿、七重塔、金堂、並びに三重塔、三重閣の配置の順で一直線に並べて、その両側から派出する横たわっている回廊が中院に左右対称する三重閣と五重閣と接続し、謂る縦横四院式の伽藍配置である。更に中院の両側には東西両院を配し、寺域の後部にも後院も設けられている。また廡廊と牆垣に囲まれた通路には四合房形の数々の小塔が五十軒ほど均整に立て並べられており、各小院の内部にはそれぞれ閣殿や僧房、経藏などの建物もびっしりと配置されている。⁽²⁷⁾

〔図六〕この図相はどこまで確実な根拠に基づいたものが判然としないが、敦煌莫高窟中唐の第三六一窟と晩唐の八五窟に描かれた観経変図中の仏寺の形態を比較すると、仏寺の中央には多層の樓閣式構造の仏殿が建てられており、その周囲に多様の配殿、廊廡、角樓及び前後殿を左右対称に配し、各庭院の中に鐘樓や八角亭式の樓閣などが置かれていることは分かる。〔図七〕更に、仏殿内部の造像配置に目を向けると、同じく莫高窟隋代の四二三窟西側天井、〔図八〕及び第四三三窟西側後部天井に描かれた変相図は、ともに仏堂内には本

尊と四脇侍菩薩を組合せて配置し、仏殿の左右側は対称して三層の閣樓、或いは配殿を設け、中にはそれぞれ供養菩薩も充填し、実際の殿内仏壇上の諸尊を配列する構成を想起させる写実的な場景である。そのほかにも、仏殿内部の様相を窺わせる二、三の実例を挙げると、唐長安四年(七〇四)に再建された慈恩寺大雁塔の西側門楣に彫り出される「線刻仏殿図」は、明清遊人の題記により画面が甚しく損毀されたものの、細緻な線刻技法で仏殿内部を場景とする釈迦說法を表現している主題が鮮明に示されている。本尊が結跏趺坐で仏殿中央の束腰蓮華座に坐し、說法の印相を結んで、両側にはそれぞれ七尊の供養菩薩が蓮弁の上に跪坐し、殿外には仏の說法を聞きに來た僧人や供養者の姿も描かれている。この線刻画は唐代仏殿の建築構成を考える実証資料であるのみならず、仏殿内部の造像配置をイメージした貴重な実例とも言える。〔図九〕また、山西省晋城寺南莊にある古青蓮寺藏の唐宝曆元年(八二五)「硤石寺大隋運法師遺跡」碑の碑首に線刻された「仏寺図」には、大雁塔門楣線刻画と同様に仏殿の壇上に釈迦、菩薩說法の場景が表現されているが、諸尊像の身後に多重樓閣式の仏寺建物を背景にして、高層の仏殿から左右に延びている回廊の閣道も付設されており、「前仏殿後樓閣」という極めて複雑な仏寺構成を克明に伝えている。この写実的な仏殿の再現図は、中唐の会昌廢仏の直前に唐代仏教最盛期における仏寺の立体的配置構成を記録する現存遺品として学界に注目されている。⁽²⁸⁾更に、一九五三年に、山西省五台县李家莊に確認された唐建中三年(七八二)の重修款記をもつ南禪寺大殿を例にとつてみると、その本殿木構と同時に作られ、しかも後世の補修や位置移動のないままに残された壇上の塑造諸尊像には、本尊釈迦像は四メートル近い天井の内虹梁に連接した宝相華文様の光背を負って、八角束腰須弥座に結跏趺坐し、左右には兩弟子、兩菩薩、文殊、普賢、侍立菩薩、天王、または跪坐する供養菩薩を対称して並列する形となっている。⁽²⁹⁾〔図十〕こうした多尊型の造像配置は、上述した大雁塔門楣上の「線刻仏殿図」や、敦煌莫高窟中晚唐時期に出現した舞台場景的な組合せにはよく通ずる特徴と言えよう。そのほかにも、溯つて北朝中、

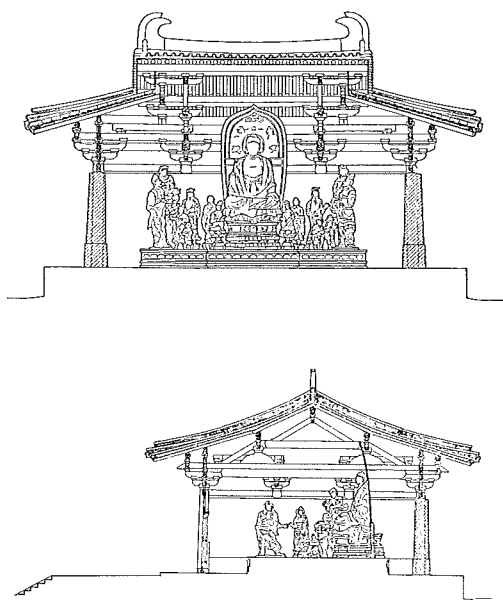


図八 敦煌莫高窟第四二三窟西側後部天井・仏寺図

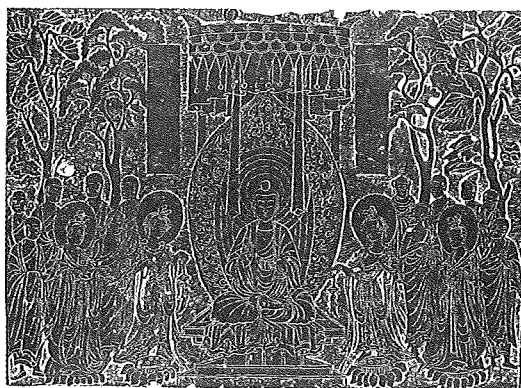


図九 西安大雁塔門楣・線刻仏殿図

晩期の一例を挙げてみると、例れば、河南省博物館蔵の北魏正光五年(五二四)銘劉根造線刻画像石に彫出された図像には、本尊身後につく大きな火焰文舟型背光が高く盛り上がって、頂部に宝珠を飾る豪華な傘形天蓋が掛けられ、弥勒本尊は須弥座に結迦趺坐し、施無畏印と与願印を結んで、左右両側には四脇侍菩薩と弟子数人も配列されている。この図像からは、以上取り上げてきた唐代の多尊型の堂内の尊像配置が、前代の北魏晩期にも既に定型化されたことを示すものである。⁽³⁰⁾〔図十一〕



図十 南禅寺大殿正面・側面図



図十一 劉根造線刻画像石・弥勒說法図

二 堂内仏像配置の主題と使用素材

次に、早期の史料から、仏殿内部に安置された尊像の主題と、その造像の使用素材の地域的特徴について検討してみよう。

仏教初伝期の中国では、伽藍配置の中心とした仏塔の造型は実際の仏典の説かれる内容により規定されたことは周知の通りである。唐の道世『法苑珠林』には、仏塔が諸尊像によつてその級数を規定されるという記事がみえ、それによれば、

又阿含経云、有四種人應起塔、一如來、二辟支仏、三聲聞、四輪王。又十二因縁経云、有八人得起塔、一如來、二菩薩、三緣覺、四羅漢、五那含、六斯陀含、七須陀洹、八輪王。若輪王以下、起塔安一露槃、見之不得禮、以非聖塔故。初果二露槃、乃至如來安八露槃、八槃以上並是仏塔。

とある。⁽³¹⁾しかし実際、官寺と私寺の仏堂内には本尊を教義に応じていかに安置し、またその内外の空間をいかに荘厳したのかは既存史料による説明が難しい。ここで改めて確認しておきたいが、四、五世紀魏晉南北朝における奉仏造寺の中心は河西の涼州を除いて、中原北方の魏晉都城周辺、山東省と揚子江下流地域、南朝の都城建康との三つの地域に集中したことは、既に史料と出土遺品の両面により確認されているが、中原北方地域には、寺院に発願奉納した尊像名と発願者を明記した造寺奉仏の史料としては、『魏書・釈老志』に「於五級大寺内為太祖已下五帝鑄釈迦立像」、または「又於天宮寺造釈迦立像」との内容が文献上の初見である。また、山東地域では、青州刺史の臨淮王婁定遠により建てられた南陽寺について、北齊武平四年(五七三)の「司空公青州刺史臨淮王像碑」には、この地域に最初の造寺奉仏の記事が伝えられている。それを摘出してみると、

南陽寺者、乃正東之甲寺也。(中略)層閣邁於涌塔、秘宇齋於化宮、遂於此所爰宮佛事、製無量壽像一軀、高三丈九尺。并造觀世音、大勢至、二大士而夾侍焉。

⁽³²⁾とある。当時、青州仏教伝播のシンボルとした南陽寺の殿内造像配置は、高三丈九尺の無量寿仏、観音、勢至両脇侍菩薩と両力士という組合わせとなり、この時期に石刻造像と同様に一仏二菩薩二力士の五尊形の主題が仏殿内に再現されたことは分る。またこの仏寺が多層の仏塔と仏殿を前後に縦列する伽藍配置の形態は、これに先立つこと四十年の北魏永熙三年(五三四)に焼失した洛陽永寧寺の配置と深い関連性を示していると言えるのであろう。

一方、北朝に比して比較的安定していた南朝では、より早い時期に各地の仏寺経像を造立する動向を見せ、慧皎『高僧卷』巻五竺法曠伝には、東晋哀帝の興寧年間(三六三―三六五)に、呉興の釈法曠は疾病に苦しむ人々を救済するために昌原寺を開き、その仏寺の本尊供養の詳細について、

時沙門竺道隣、造無量壽像、曠乃率其有縁、起立大殿。(中略)晋孝武帝欽承風聞、要請出京、事以師禮、止於長干寺。

と伝え、この昌原寺には竺道隣より寄献された無量寿像を安置するために金堂が建立された。同書巻五の竺道壹伝には、東晋孝武帝(在位三七三―三九六)頃、呉郡の故地であつた虎丘山に、

郡守瑯琊王薈於邑西起嘉祥寺。(竺道壹)乃抽六物遺於寺、造千牒金像。

との記事もみえ、当時、この嘉祥寺は千仏思想の流行を背景に鍍金の千体仏によつて堂内を荘厳していた事実が窺われる。また梁の宝唱『比丘尼伝』巻二建福寺道瓊尼伝第四には、丹陽人の僧尼道瓊が宋文帝元嘉年(四二四―四五三)に、

以元嘉八年(四三一)大造形象、処々安置。彭城寺金像両軀、帳座完具。瓦棺寺弥勒、行像一軀、宝蓋瓔珞。

南建興寺金像二軀、雜事幡蓋。於建福寺造臥像並堂。又製普賢行像、供養之具靡不精麗。又以元嘉十五年（四三八）、造金無量壽像、以其年四月十日像放眉間相光明照、寺内皆如金色。

との記事があり、更に、『法苑珠林』卷十七敬佛篇第六の五は、劉宋孝武帝の大明四年（四六〇）に、

宋路昭太后造普賢菩薩乘宝輿白象、安於中興禪房、因設講於寺。

と伝えている。同じく慧皎『高僧伝』卷十三釈法悦伝には、僧祐律師が撰山大像と剡溪大仏を造営した後、引き続き大規模な興仏造寺の事業が行われ、その当時の盛況については、

昔宋明皇帝經造丈八金像、四鑄不成、於是改為丈四、悦乃與白馬寺沙門智清、率合同縁、欲改造丈八無量壽像、以申厥志。大梁天監八年（五〇九）五月三日於小莊嚴寺宮鑄、匠本量佛身四万斤銅、融瀉已竭、尚未至胸、百姓送銅、不可稱計。（下略）

と伝える。以上の記事は、江南地域における盛んに興った仏像製作の様相を窺わせるとともに、北朝より先行する南朝側には、長江下流域に流行した浄土信仰に基づいて、鍍金銅鑄の無量寿像を主として、弥勒、涅槃、普賢、千仏金像などの北朝と異なった尊像の題材が多く製作されており、これら造像を安置するために、「帳座完具」や「供養之俱莫不精麗」と記されたように、極めて高度な技法による繡帳、置座、調度品などの堂内莊嚴が同時に行われたことも読み取れるのである。

次に、南朝と北朝の造像使用素材に関する史料を取り上げてみよう。まず、南朝に目を向けると、従来仏教美術史上に知られる戴逵の事蹟に注目すべきことはいうまでもないが、⁽³⁴⁾『梁書』卷五四諸夷伝に記された東晋の義熙年（四〇五―四一六）、天竺将来の玉像を安置する瓦棺寺（東晋哀帝興寧年、三八三―三八五の創建）の記事に、

寺先有徴士戴安道手製佛像五軀、及顧長康維摩画図、世人謂之三絶。

との内容がみえ、唐の張彦遠『歷代名画記』卷五戴逵の条には、

達既巧思、又善鑄佛像及彫刻、曾造無量壽木像、高丈六、并菩薩、（中略）此像今在越州嘉祥寺、今亦有達手鑄銅佛、并二菩薩在故洛陽白馬寺、隋文帝自荊南興皇寺取來。

との記事も伝えている。⁽³⁵⁾これらの仏教美術史文獻からわかるように、江南地域に一時流行した戴逵の仏像製作手法が「手製」を特徴とするもので、瓦棺寺の五軀仏塑像や、越州嘉祥寺の木造無量壽像、洛陽白馬寺所蔵の荊南興皇寺伝来の金銅仏像などは、様々な技法と素材で作られたものが見出される。更に唐代の史料を拡げてみると、この時期に仏像の製作に関しては、『建康実録』卷十七の大愛敬寺の記事に、

大中四年（不詳）又造一丈六尺旃檀像。

とあり、唐の道宣『統高僧伝』卷一宝唱伝には、

（大愛敬寺）中院正殿有梅檀像、举高丈八。

と伝える木造の梅檀像がみえ、この梅檀像は、当時梁代官制大寺の主要本尊としたことが知られている。また『建康実録』卷十二太祖文皇帝の条の割注に、唐の段成式『寺塔記』の清園寺に関する記事を徴引して、それによって、

宋元嘉二年（四三五）以王坦之祠堂地與比丘尼業首為精舍。（中略）起殿。又有七佛殿兩間、泥素精絕。

とあり、「泥素」というのは、この七仏殿の造像手法が泥胎の塑造像であつたことは示されている。そのほかにも、唐の道宣『律相感通伝』に荊州河東寺の殷盛を記録する際に、

荊州河東寺者、此寺甚大。殿前塔、宋譙王義季之所造、塔内塑像及東殿中弥勒像、並是忉利天工所造。

と伝えられ、荊州河東寺の塔内に安置された本尊は塔本塑像であり、この製作手法が洛陽永寧寺塔内にみえる泥塑仏像の形態に相通するものと考えられる。

これまでまとめてきた造仏事情から見ると、仏教伝来期の南朝地域に流行した堂内本尊の製作形態は銅鑄造

像、鍍金銅像の形式が最も多く、その次に木彫像や泥塑像、そして戴逵の彩絵夾紵像の手法も盛んに使用されたようである。またこれらの仏像を安置する際に、高度な表現技法を駆使する堂内の荘嚴も行われたことも、南朝地域のもう一つの表現上の特徴とも言えるのである。

その一方、造像手法の多様化の伝統を有する南朝に比して、北朝の状況は如何であろうか。その結論を先に言えば、北朝側には石窟寺院造宮の比重が高いことからして、金銅鍍金像を寺伝の本尊とする例を除き、その殆どが石窟寺院の影響を受けたもので、石製素材の造像が多く作られた傾向にある。ここで、史料上記載の作例を徴すると、酈道元『水経注』卷十三には、北魏の旧都平城周辺に建てられた仏寺について、

又南逕皇舅寺西、是太師昌黎王馮晋国所造、有五層浮屠、其神圖像皆合青石為之、加以金銀火育、衆綵之上、燐々有精光。

と伝えており、また同書同卷には平城県の故城にある恒州の仏寺について、

(漢)水右有三層浮屠、真容驚架、悉結石也。裝制麗質、亦盡美善也。(中略)東郭外、太和(四七七―四九九)中、闍人宕昌公鉗耳慶時、立祇洹舍於東阜、椽瓦梁棟、臺壁欄陛、尊容聖像、及牀坐軒帳、悉青石也。

との記事もみえる。⁽³⁷⁾このように塔堂内に安置した石造像や石製の荘嚴を行った上で、更にその表面に金銀裝飾や、彩絵などを貼付する形式は、『洛陽伽藍記』に伝えられた「莊嚴仏事、悉用金玉」との記述の通り、⁽³⁸⁾北魏時代の北方地域において共通した石製彩絵の伝統技法を根強く沿襲していたことを物語っている。そのほかに、北斉の河清二年(五六三)、北斉皇室が鄴都で三十万工匠を勞役させて造宮した大興聖寺は、天統四年(五六八)、武帝が歿した際に、胡皇后は施主として聖觀音石造像一軀をこの寺に献納したことがあり、⁽³⁹⁾清の錢大昕『潛研堂金石文跋尾』には、現在の河北省臨漳県三台仏寺跡で発見された胡皇后の「造觀世音石像記」の發願文を抄録して、それを記せば、

皇太后以武平二年(五七二)十一月十三日敬造觀世音石像一区、以茲勝善。仰資武成皇帝、昇七宝之宮殿。

となる。⁽⁴⁰⁾ こうした皇太后の石造觀世音本尊を奉納する記事からは、中原地域において、木造の寺院内に本尊製作の素材を石製とする強靱な地方的伝統が根強く継承されていたことを窺わせるのである。以上の記事を総合してみると、南北朝時期において、本格的な寺院堂内の造像製作から現われた南北の地域的差異は存在し、北方は、石窟寺院造営の影響を受け、北朝中、晩期において堂内の本尊や献納仏像のいずれも石製のものが圧倒的に多かったことは確かである。一方の南方では、多地域間の仏教文化交流や、社会的に影響力をもつ彫刻家の活躍によって、金銅像、木造像、繡像、塑像、干漆夾紵像など、多様化の様相が呈しており、しかも、その多様化到来の時期は北朝よりやや早いものであった。

三 寺院址出土の資料から見た堂内造像の配置

魏晉南北朝、隋唐時代の寺院址の分布情況は、出土地の最も集中した地域として、北は河北省、南は安徽、江蘇省、東は山東半島、西は四川省まで広い地域に及んでおり、以下、この地域の分類に従ってそれぞれ検討していくことにする。

1 河北、山西地域(東魏、北斉の都である鄴城を中心とする地域)

- (1) 河北省曲陽県修德寺址出土の石刻造像(東魏→唐代)、一九五四年発見
- (2) 河北省鄴南城址周辺出土の石刻造像(北斉→北周)、一九八〇年報告
- (3) 河北省邯鄲鼓山常楽寺遺址出土の石刻造像(北朝→唐代)、一九七九年発見

(4) 河北省藁城県出土の石刻造像(東魏→北齊)、一九七八年発見

(5) 山西省沁県南渚水村出土の石刻造像(北魏→宋代)、一九五七年発見

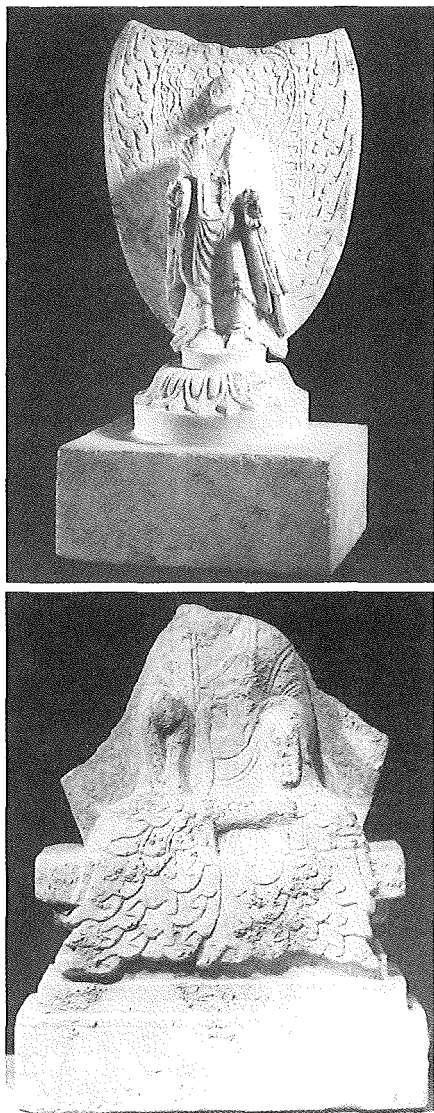
(6) 河北省景県出土の石刻造像(東魏→北齊)、一九七三年発見

(7) 河北省唐県寺城澗村出土の石刻造像(東魏→唐代)、一九六四発見

そのうち、一九五五年に報告された曲陽修德寺址出土の在銘白石造像は、石窟以外の仏像製作水準を知るものとして、またその二千二百点の莫大な発見数量で早くも学界に注目されていた。この仏寺址は、太行山脈の東麓に位置する曲陽県城外の西南にあり、現在、修德塔と呼ばれる八角六層の舍利磚塔が寺址の南側に現存するが、一九五四年の調査によって、塔の上層台上に北宋天禧三年(一〇一九)の重修銘が発見され、唐代から明代の正徳年間(一五〇六―一五二一)にわたって修德寺と称される若干の規模を持つ寺院であったことがわかった。この寺址は南北の長さ百メートル、東西の幅は三五メートル、伽藍中軸線上に南から南大門、その後それぞれ三間構成の前殿と後殿があり、その両側には配殿が置かれ、正殿の正面中央に版築による仏壇の遺構も確認された。仏殿址の敷地内には石彫像とその残塊、壁画残片を始めとして、琉璃瓦當、蓮華文、鬼文瓦當、獸形鸚尾及び石彫伎楽人像などの遺物が検出された。この二千件以上の石造像は、丁度寺院の最も中枢部にある正殿仏壇の西南角と西角の両窖藏の中で発見されたのである。改めて「発掘簡報」の内容を整理してみると、まず、窖藏内出土の仏像遺物の中には十数センチの大きな手指残断が検出されたことから、この仏寺に置かれた尊像は少くとも十数メートル以上の大型像であったことと、仏殿基壇や次層以下の礎石も未発掘のため、実際の寺院の配置規模と具体的区画が明らかにされていない。更に寺院の西側に残存した基壇や、修德塔周辺には発掘作業を行う前から、既に相当数量の在銘像、仏像台座などの遺物が村民によって発見されたとの報告があった。そして、修德寺造像出土の位置は碑志に伝えられた隋代の初創である定州恒嶽寺(北嶽廟)との距離が近

い、などの諸疑点について、なお再考察を必要があると思われる。⁽⁴²⁾

これら二千余件の石刻造像の中には、紀年銘を有するものが二百四七件を数え、その殆どが高さ二十―三センチの小型像である。紀年銘像のうち、北魏期の造像は釈迦、弥勒像が大半を占めたのに対し、東魏、北斉時代の作例では、次第に無量寿、阿弥陀、菩薩、菩薩形の交脚弥勒、両尊並坐の思惟像の主題が多くなり、更に隋代以後になると、単独の弥勒像と阿弥陀像が現われる。制作形式の特徴としては、石像の下部には四方形や、六角型の重厚な台座を配し、台座の上層に蓮華座、須弥座などの仏座がきめ細かく作られており、それらは寺院内の特定の場所に安置するために、ほぼ同様の高さで作られ、視覚的に重さと安定感を重視する傾向が感じられる。〔図十二〕 こうした曲陽周辺の信者が供養のために修徳寺に献納した造像の多くは、具体的に寺院のどの場所、如何に配置されていたかについては明らかでないが、公表された造像全体の様相を見るかぎ



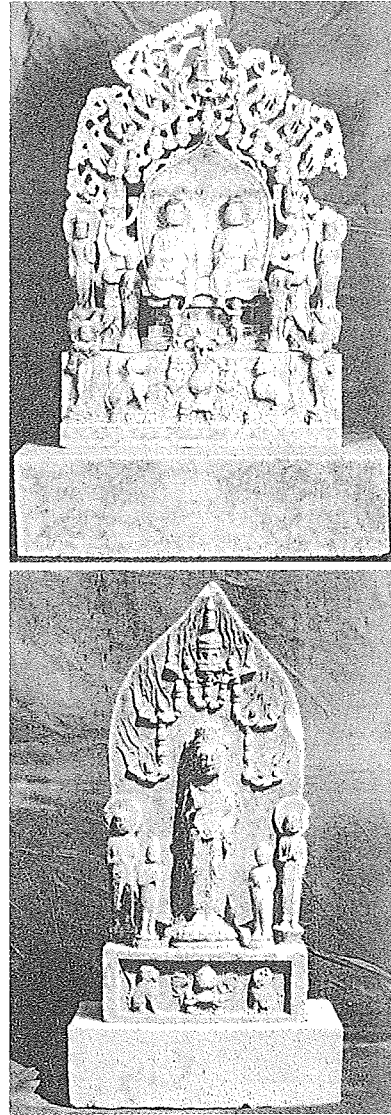
図十二 曲陽出土東魏天平三年銘如来立像(上)、如来坐像(下)

り、前殿の壇上にはその大型の独尊の白玉像を置き、主尊の周囲及び仏壇の下側にこうした単体の献納造像が井然と列置された、という中原地域の堂内配置伝統を持つことは、ある程度推測できるのであろう。

(2)の鄴南城址出土の北朝造像、(7)の唐県寺城澗村出土の北朝像、(6)の景県出土の北斉造像は、その制作様式から見ると、当時、華北地域に拡がっていた曲陽派白石造像の伝統の影響下に制作されたものと考えられるが、鄴南城は嘗て東魏と北斉の国都で、この周辺に十六体の東魏の武定、北斉の天保、河清、天統年号の紀年銘白石造像が出土したほか、同時代の蓮華文瓦當などの寺院遺物も検出されたことがある。⁽⁴³⁾景県の九件東魏、北斉の石造像が開福寺と伝える廢寺址で発見されており、この開福寺の詳細について、『景県県誌』に若干の記事がみえるものの、寺の初創時期と沿革は不明である。この廢寺址では、宋代に建てられた一基の舍利塔遺構のみが現存しており、そこで均整な台座に紀年銘を刻んだ豪華な寺内献納仏像が発見された。⁽⁴⁵⁾そして、一九六四年、一九六五年に二回にわたって唐県の寺城澗村から二十七件の東魏、北斉紀年銘造像が出土された。⁽⁴⁶⁾ことに東魏興和四年(五四二)釈迦白玉坐像に刻まれた「北澗寺比丘道縁敬造白玉像一軀」との銘文から、造像の埋藏場所は、もともと北澗寺と呼ばれた古代寺院の跡であり、その創建は東魏時代に溯ることが推定されている。この東魏興和四年(五四二)銘文、並びに北齊武定四年(五四六)造思惟像の銘文には共に「為皇帝陛下」との字句を刻んだことから、当時、幾多の信者、願主の集まってきた北澗寺は、高歓に擁立された崇仏的な孝靜帝と関わり深い寺院であつたことが窺われるのである。唐県は曲陽地区に隣接した地域であるため、この廢寺址出土の造像は、曲陽周辺で作つて運ばれてきた可能性が大きい。像の彫りの精粗はあるが、曲陽造像に見出された特徴と同様に、小型の独尊釈迦像は主として、次に釈迦多宝仏坐像、観音像、半跏思惟像などの主題もあり、制作の手法にも曲陽造像と極めて類似である。また北澗寺の造像埋藏坑には、七体の隋唐時期の残像や、各種の文様瓦、排水煉瓦、陶瓷器破片も検出され、造像銘文にみえる北澗寺は唐代に至るまで地域的に重要な仏寺

であつたことは示されている。

(4)の河北省藁城県賈同村出土の八体北斉時代の紀年銘石造像⁽⁴⁷⁾は、前出の造例と比べて数量が少ないが、その制作手法は複雑で、まさに石窟寺壁面に浮彫されている細緻な完成度の高い小龕を彷彿させるものである。その出土の八件造像のうち、五件が共に両尊並坐の樹下双思惟弥勒菩薩半跏像を表現主題とし、残る三件も単尊の半跏思惟像、或いは菩薩立像で、北斉時代に華北地域に流行した弥勒菩薩下生を待望する信仰を背景に制作されたものであろう。特に北斉河清元年(五六二)銘白玉弥勒像と武平元年(五七〇)銘菩薩立像は、曲陽造像に見られぬ二層の組み立式の四方型台座を配し、下層の台座には四周に大量の発願銘文を刻みめぐらしており、上層には獅子や蓮華転生像、または博山爐を捧げる侏儒などの浮彫図像が彫り出され、極めて複雑な裝飾意匠を表わしている。〔図十三〕 こうした二層台座の上に更に須弥壇や蓮華座を配して、尊像の背後に透彫した龍華樹を背屏にする裝飾構成は、当時の製作者が堂内の配置効果を意識して工夫したものであろうと考えられる。



図十三 藁城出土北斉河清元年弥勒像(上)、武平元年菩薩立像(下)

造像の出土地点は、北斉河清元年(五六二)紀年銘像から判読された「建忠寺比丘尼員度門徒等造」との字句から、もともと東魏、北斉時代の建忠寺廃寺址の敷地内にあったことがわかり、これらの造像は建忠寺に配置された献納品であつたと判断されよう。

一方、河北省邯鄲北響堂石窟の附属遺構とした鼓山常楽寺遺址の堂塔周辺には発掘調査により、約百四十点余りの寺院関係遺物も出土された。⁽⁴⁸⁾ 現在、確認された地上に残る寺院建物跡としては、伽藍中軸線上に南から南大門、天王殿、三世仏殿、大雄紺殿、地藏菩薩殿を一直線に並べ、大雄紺殿と三世仏殿の間には東西配殿が設けられ、西配殿の南側には鐘樓、東配殿の北側には禪房がそれぞれ配置されており、また山門より寺院敷地外の左右側には自來仏殿と普同塔も建てられていた。この配置形態は必ずしも創建当初のものではないが、発掘調査によつて明らかにされたのは、寺の築地跡下部に残る建物の積土は殆ど原初のままの状態であることから、歴代にわたつて数回の大規模な拡大整備事業を行ったものの、寺院主体構造の状態が当初とは基本的に変わつていなかったことは判明された。常楽寺の初創については、三世仏殿裏側の地上に残存している「大金正隆四年(一一五九)常楽寺重修三世佛殿記」の碑文は重要な手がかりであり、それを記せば、

文宣帝(高洋)自鄴都詣晋陽、往来山下、故起離宮、以備巡幸。於此(欠一字)腹見数百聖僧行道、遂開三石室、刻諸尊像、因建此寺、初名石窟寺。後主(高緯)天統間(五六五―五六九)改智力、宋嘉祐(一〇五六―一〇六三)中復更為常楽。(後略)

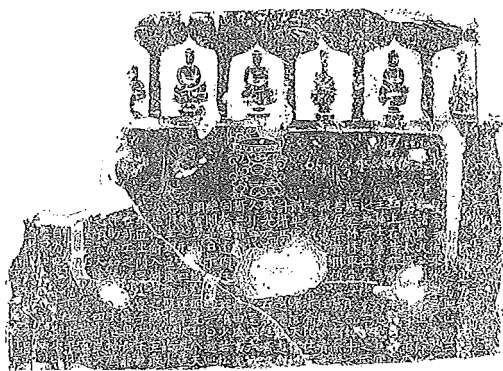
とある。それによると、常楽寺の初創時期は、碑文中の「三石室」と称する北斉文宣帝により発願した北響堂山石窟寺の北、中、南洞の三大窟の興建とはほぼ同時期で、その寺名は始めて石窟寺と称され、北斉天統年間(五六五―五六九)に智力寺と改称し、更に北宋仁宗の嘉祐年間(一〇五六―一〇六三)以降には常楽寺と呼ばれたのである。⁽⁴⁹⁾

常楽寺址出土の石造像について、「発掘簡報」には、三世仏殿址の地上に残存した八件の石造像を除いて、地下からおよそ八十件の石造残像が発見されたが、そのうち、独尊の小型供養菩薩、弟子、天王立像が最も多く、次に如来、菩薩形の独尊坐像も数件ある。三世仏殿跡の地上に残存した大型独尊仏坐像は宋代以後の作とされるのに対して、出土石造像の場合は唐代中、晩期に制作されたものが比較的に多い。この点に注目する限り、常楽寺は初創時の北斉時代の殷盛に続いて、中晩唐時代にも、それに劣らない造像製作の盛況を続けたことが窺われるのである。また、堂内造像の配置に関しては、残念ながら「発掘簡報」に関連事項の記載が極めて簡略であるため、事実関係を明確するに至るのが難しいが、この限られた公表内容によると、三世仏殿内には中央に位置する石積みの仏壇上に釈迦、弥勒、阿弥陀からなる三尊像を中心に、更に両弟子、文殊と普賢の各一組を配し、それを展観するために殿内四周には廻廊も設けられていた。また寺院の主体建物である大雄紺殿は石と木の材質で築造されており、石階と門欄にも獅子や八弁蓮華文様で彫り出され、堂内中央に石組みの大きな仏壇の遺構が残されている、という寺院配置の具体像が確認されたのである。

2 山東地域（山東省西部の青州を中心とする地域）

青州は、東魏・北斉時代に山西の並州（太原）と並び、古くから統治者政治権力角逐の中心であり、また文化発展の面では長江下流の建康を中心とする南朝や、山東半島に直接上陸する南海諸国の仏教文化との関わりが深かったため、早くも黄河下流地域の仏教繁栄の中心となったのである。但し、山東半島では、中原地域の龍門石窟と雲岡石窟のような中心的役割を果たした京城の國家級石窟寺院が存在せず、地方寺院は局地的に散在していて、仏教造像の制作水準のまとまりとして把握しにくいことは事実である。その主な発見を記せば、以下の通りになる。

- (1) 博興県龍華寺遺址出土の石刻造像(東魏→北齊)、一九七六年、一九九〇年発見
 - (2) 諸城市古城遺址及び寺院址出土の石刻造像(東魏→北齊)、一九八八年発見
 - (3) 高青県廢寺址出土の石刻造像(北魏、北齊)、一九七六年発見
 - (4) 青州市興国寺址出土の石刻造像(北魏→唐代)、一九八一年発見
 - (5) 惠民県玉林寺址出土の石刻造像(東魏、北齊)、一九九七年発見
 - (6) 広饒県永寧寺址出土の石刻造像(東魏→隋唐)、一九九六年報告
 - (7) 青州市龍興寺址出土の窖藏石刻造像(北魏→隋唐)、一九九六年発見
- (1)の博興県域では、一九七六年から一九九〇年まで数回にわたって、龍華寺遺址から大量の北朝時期の仏教石彫像、金銅仏像、造像碑、または蓮華、獸面、忍冬文様の瓦當、筒瓦、板瓦、文様磚などの寺院遺物が続々と出土された。⁽⁵⁰⁾この龍華寺の由来については、これまでに公表された調査報告を総合すると、『博興県誌』芸文志に著録されている、一九二三年に廢寺址で発見された隋仁寿三年(六〇三)銘の龍華寺碑に「絶代之遺踪、華塔者、地為古龍華道場之墟」と記される内容や、または一九七六年に遺址の東側から検出された「武定五年(五四七)建刹碑」の碑文に「在郷義寺門外之左頰、早起浄土彼建勝利」との字句が判読されたことにより、この広い寺域を持つ廢寺址では、隋代以前に少くとも西側寄りの龍華寺と東側に位置する郷義寺といった二軒の古刹が並存したことがわかった。そして、龍華寺の興亡時期に関しては、出土造像紀年の上下限は北魏太和二年(四七八)と隋の大業四年(六〇八)とするので、この寺院の創立は北魏孝文帝の執政初期に溯ることができ、その後盛衰を経て、隋末の煬帝高句麗遠征に反抗する地元の農民叛乱(隋大業七年、六一二)の勃発をきっかけに、唐代に至らずに廢寺となった、と推測される。また郷義寺の創建年代は龍華寺よりやや遅れて、東魏の武定五年(五四七)頃と推定する説もある。⁽⁵¹⁾しかし、龍華寺の発掘資料は極めて限られているので、寺院の規模を検討



図十四 龍華寺址出土隋大業四年仏造像残碑

下端を地面に斜めおろして、手に法器や供物を持ち、方形の敷物の上に跪坐し、視線より高く配置した仏龕内の如来像を供奉する姿である。また供養者の身後には三人の男女侍者が跪坐して、手に棧燈、供盆を捧げ、後続する女侍が長裙と窄袖衫の装束を着け、飛天のように優美な造型が表現されている。そして画面の構図は左右対称をなし、仏像と世俗人物の間は宝珠火焰文様で仕切られており、上段の仏龕及び中段の世俗信者の中央に宝珠火焰形舍利塔や天蓋の装飾も配されている。その表現主題は現地の信者及眷属らが祖先のために七仏尊像に施入奉納する場合、即ち、中原の石窟寺窟内の浮彫に例類の多い「礼仏図」を表現するものであったと考えられる。更に碑の下段には四百字で書かれている隋の大業四年(六〇八)に龍華寺を修治復興する追記や、そ

する余地が殆どないが、その一方、数回の発掘調査により出土した百件以上の独尊の釈迦、菩薩像や、造像台座などの仏教関係遺物の中には、それらの数々の造像を安置する形態と堂内の供養場面を考える際に鍵となるものが若干得られたと思われる。それは、一九八四年に出土した紀年の最も遅い隋大業四年(六〇八)銘を持つ仏造像残碑である。

〔図十四〕 この造像碑は発見した時点で既に下半部が欠損されているが、残る上半部の碑面に彫り出された内容が三つの部分に構成されており、上部には舟型光背型の七仏龕を開き(五龕が現存する)、その龕内に置かれている独尊の如来像は禪定印を結んで、覆弁蓮華須弥座に結迦趺坐の形をなす。通肩式と偏袒右肩式の着衣法を簡素にして、隋、初唐の様式の特徴が目立つ。碑の中段に浅浮彫で刻まれる窄袿波式の舍利塔を囲んだ四人の年輩供養者は、褒衣博带式の大衣を着け、裙の

れにかかる仏寺施入の五十数人の僧尼信者氏名を判読することによって、龍華寺は隋代の時点にも、青州地域の重要な仏寺であったことが判る。なお、博興出土の石造像や、金銅造像の中には、後世の重度の補修、或いは未完成品も含まれていることから、当時、寺院に附属する専門的な造像製作の機構が存在していたことを指摘する見方もある。⁽⁵²⁾

(2)の諸城出土の造像が博興の造例とやや異なっており、如来と菩薩の単独像が多く見られるのは特徴である。菩薩像は、面長の相貌で豪華な高い宝冠をいただき、全身には複雑な極めた璽珞や胸飾が彫り出されており、柔軟で自然な曲線によって人体の豊かさが表現されている。如来像は、平肉髻で頭部がやや大きく、薄い衣文が身体に密着して美しい体の輪廓を呈している。このような諸城造像は、青州龍興寺造像が発見されるまでに、

この地域に石窟以外の仏像制作活動を考える上で極めて重要な情報源となつたのである。また、諸城の「発掘簡報」には、一九八八年、一九九〇年の兩次調査で併せて石造像三百件、並びに瓦當、台座、光背の残塊、碑額残断などの寺伝遺物数十点を発見したと報告されているが、その出土遺物の数量と規模から見ると、この場所が、博興の龍華寺とは類似するか、もしくは龍華寺より規模の大きい北朝の仏寺址であつたと推測される。⁽⁵³⁾しかし、諸城の廢寺が嘗て何時何人によつて造営されたかに関しては、地方誌史料、または出土造像銘記にはいずれもそのような手がかりが見当たらない。ただ、出土した二十四件の発願紀年銘を持つ造像のうち、東魏の武定三年(五四五)、武定四年(五四六)、北齊の天保三年(五五二)、天保六年(五五五)の四件紀年像が含まれているため、少くとも東魏から北齊末年に至つて、この寺院の造仏寄奉活動がその盛期を迎え、北周武帝の廢仏によつて衰亡に向つたのではないかと考えられる。⁽⁵⁴⁾

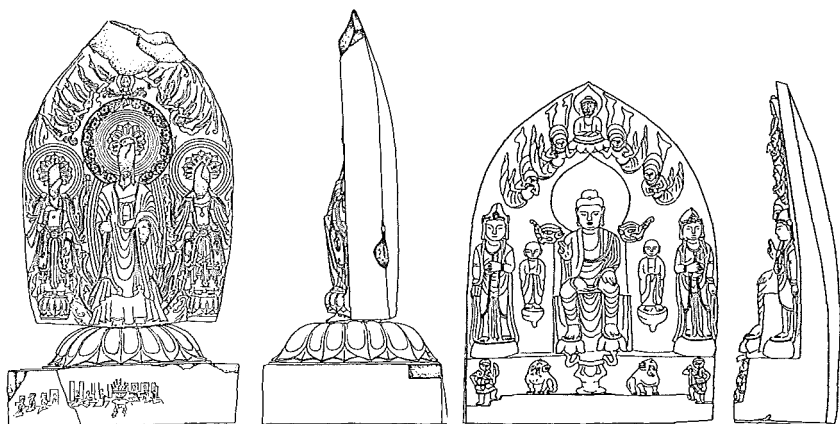
そして、その出土遺品の中に堂内の造像配置を考える上で注目し得る材料としては、「調査報告」に「多体坐像」と称される独特の石造像である。〔図十五〕この像は、僅かに全体の右下部残断しか残されておらず、



図十五 諸城出土多体仏坐像

台座の部分も失われたが、造像の構成は上下段に分けられて、いずれも長型の仏壇のような台座を設け、下段には禪定印の印相を示す如来像一尊を置き、上段にも同形の姿で二仏並坐像が配されている。また、上下二層に挟まれる中部の空間には、本尊と思われる大きな如来坐像が中心の位置に置かれており、全体の構図が左右対称を呈し、残存した四尊の如来像がともに後屏のついた長形台座上に倚坐する。こうした通常の龕像制作の中に見られぬ一組多尊形の構成形式は、まさに仏堂内の壇上に本尊と脇侍、あるいは納奉仏造像を組み合せて統一的に安置する場景を再現する意図を持つていたと理解してよからう。この像の確実な製作時期は明らかでないが、その如来像の造型としては、禪定印を結んで五段の宣字形須弥座に坐し、通肩式の着衣が懸裳を中央と両脇の三部分に分けられ、両脇の衣端を尖がらせて魚鱗状を呈して垂下させ、衣文の襞も簡潔で厚重感を持つている。このような特徴は朝鮮半島の高句麗仏像との関連性があると指摘する説もある。⁽⁵⁵⁾ いずれにせよ、この像は涼州から中原北方への直接に繋がっている様式の特徴が濃厚である点から見ると、おそらく北魏太和晚期に製作されたものと想定して違いないであろう。

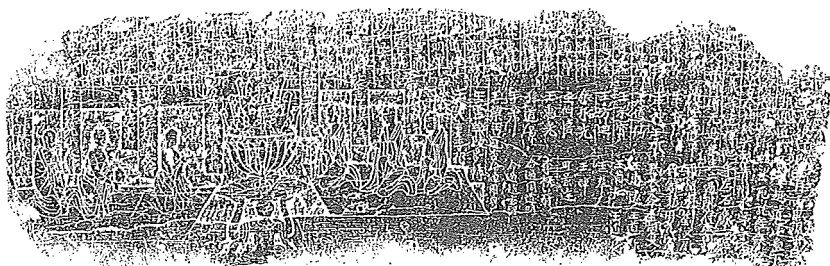
(5)と(6)の惠民県と広饒県は青州の南部境域に近接し、黄河の入海口に近い。一九九七年に、惠民鎮西南の沙河楊村にある古寺址に、十数点の大型の北朝晩期の紀年銘仏像が発見された。⁽⁵⁶⁾ その出土遺品の中には、東魏天平四年(五三七)を最古の紀年銘とする道玉、嚴懷安造弥勒一光三尊像を始めとして、東魏武定六年(五四八)王叔義造二仏並坐像、北齊初期の張称伯一光三尊像、北齊天保七年(五五六)蓋僧伽造太子思惟像などの諸像は、



図十六 広饒出土永寧寺造像碑(左)、皆公寺造像龕碑(右) (描起し図)

保存状態が比較的良好である。また、近年、広饒県城南の古代寺院址で出土した北魏正光年間(五二〇―五二四)の作とされる百冊、段家、皆公寺の発願者銘を記する三件の大型独尊如来造像碑、並びに北魏孝昌三年(五二七)銘の張談造像碑も、青州地域様式の代表的な作例として挙げられる。⁽⁵⁷⁾これら広饒発見の大型立柱式の造像碑はいずれも舟型光背を負った如来立像が主尊として、その光背が後屏式で、本尊足下の二重覆弁蓮華台座に繋いで一体となる組み立ての構造は非常に特徴的である。〔図十六〕この特殊の造型は、造像の表現内容上に求められたものというよりも、むしろ寺院内の礼拝像を展観するためにデザインされた構成であると考えるべきであろう。

また、広饒県李鵠郷出土の永寧寺造像碑は、その大きな舟型光背が蓮華台座と分離して本尊の身後に配され、独特な装飾性を示すものがある。蓮華台座の下部に更に厚い正方型台座が設けられ、台座の正面には、一組の比丘供養図像が陰刻で彫り出されている。〔図十七〕画面には、中央に一力士が大きな博山爐を頭上に支え上げて、両側にそれぞれ十人の跪坐の姿で礼仏する仏装の供養者が描かれている。また、人物像の頭部上側に信刻まれている「供養時」という字句から見て、この線刻図は信

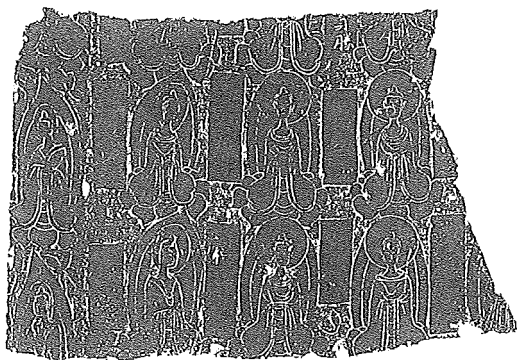


図十七 永寧寺造像碑台座前陰刻線画・銘文

者による仏堂内に供養する場面を視覚的に再現するために加味されたものであると判断されよう。更に永寧寺造像碑は、供養者像の周囲に「青州永寧寺比丘諸法義等造釋迦牟尼石像一軀」との字句や、数十人の供養者氏名を銘記しており、又「歲次丁巳正月丙申朔卅日」の干支紀年を示したことから、この像の製作時期は、東魏の天平四年(五三七)にあたりと考えられる。このように出土仏教造像遺物の豊富さからも、古代青州の仏教文化繁栄の境域に収められた惠民と広饒地区が、南北朝において造像製作活動の一中心であったことは確かであるが、ただ惠民地区の玉林寺、広饒県城内の皆公寺、青州境内の永寧寺といった地方の重要寺院の詳細については、未だ明らかにされていない。

そうした状況の中、近年、青州市城東の黄樓鎮遲家村にある興国寺遺址、または青州故城の西門南端に位置する龍興寺址境内から大量の石造像が出土されたことによって、同地域における寺院の規模や堂内仏像配置の模様を改めて考える重要な研究転機が訪れたのである。⁽⁵⁸⁾

青州の興国寺に関する記事は、歴代の方誌にはともに伝えておらず、寺院の由緒は全く明らかでない。また、造像に刻まれた若干の紀年や、造像主題、発願者氏名などの銘記があるものの、その安置場所に関する記事が一切見当たらない。しかし、寺址域内に出土された四十件近くの造像のほか、東魏、北斉、隋唐の各時期にわたって作られた瓦當、瓷器、蓮華台座などの寺院関係遺物が集中していることから、この場所が、本格的な伽藍と堂塔を備えた古代の大型寺



図十八 青州興国寺址出土線刻千仏

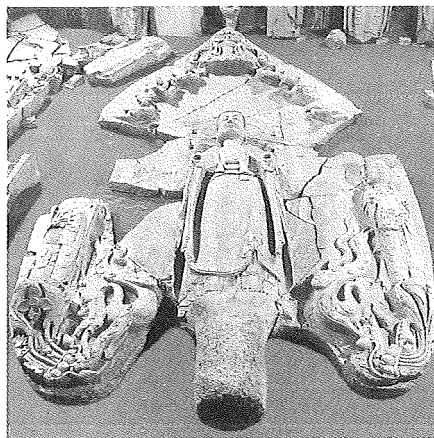
院址であったことは推測されるのである。興国寺址出土の遺品のうち、特に興味に引かれるのは、一光三尊像中の脇侍菩薩の残損部分である。この像の背面には、三段並列の如来形千仏が線刻で彫り出されており、各千仏の造型は世俗供養者の姿にかたどって、薄い蓮弁の上に結迦趺坐し、瘦身、長面、細頸、切れ長につり上がった眼が微笑みを浮べている。通肩式の寛袖袈裟を長く垂らし、両手を衣内に隠して組んで、又身後にはそれぞれ円型頭光と背屏が配されている。全体の表現としては繊細で柔らかな相貌が特徴である。〔図十八〕この図相を見るかぎり、青州地域の寺院内部では、単尊の背屏式造像を奉納する際に、このように造像を仏殿内のあらゆる空間において並べて充填するという配置の形態を想起させるものであろう。この造像は、発願文や紀

年がないが、青州地域によく見られる共通する菩薩の様式特徴を考え併せると、東魏時期の作と推定して差し支えないであろう。

次に、龍興寺出土の造像の中には、特に背屏を持つ一光三尊像の本尊と台座の間に、一本の柄で差し込む仕組が構造上の特徴である。これまでに復原されている背屏式造像と呼ばれる多くの作例では、独尊、三尊と五尊の立像が類別されるが、それらはいずれも舟型光背を負う特徴で、蓮華円型台座に差し込むために大きな柄を一本出して固定する形式となっている。そのうち、最も注目すべき作例としては、三一〇メートルの高さを有する、これまでの出土像の中に最大級の彩絵釈迦三尊立像である。⁽⁵⁹⁾〔図十九〕この像は出土した際、既に粉碎状態となったが、残存する八割りの断塊によって見事に復原されていた。この像は本尊と左脇侍が複雑を極めた装飾蓮台の上に立ち、身後に附



図二十 青州七級寺址出土如来三尊立像



図十九 青州龍興寺址出土彩繪三尊立像

いた巨大な舟型光背には、覆鉢形の相輪塔を中央に、その周辺に飛天と火焰文を巡らせ、台座下部の空間には双龍の口に銜える蓮華が彫りの深い浮彫により鮮やかに装飾されている。これまでに例類のない制作規模から考慮すると、この大型造像は寺院内部に配置された造像群の本尊か、もしくは本尊の脇侍とした役割を持つ主要尊像であったものと考えられるのであろう。それと関連して、前述した

龍興寺の初創にかかわる北齊時代の「臨淮王像碑」の記事にみえる南陽寺の本尊とした「三丈九尺」の無量寿像及び観音、勢至両脇侍の造立内容を考え併せると、嘗て南陽寺の本尊がこのような形態で制作されたことも想像されるのであろう。

これとは別に、龍興寺造像が出土する前に、既に青州市内には前述した大型釈迦三尊像の構造と類似する舟型光背を持つ如来菩薩三尊立像一件が発見されたこともあった。⁽⁶⁰⁾この像は背光周縁部の火焰文や身光、頭光の圈帯、蓮弁、唐草文などの装飾がすべて浅浮雕で彫り出され、更にその表面に鮮やかな顔料で彩絵している。像の本体に附属する蓮弁型台座は失われていたが、舟型光背下部の中央には台座へ差し込むための大きな柄を持つ形式が、龍興寺造像にみえる一連の造例とは共通する仕組みである。⁽⁶¹⁾〔図二十〕この像の出土場所では、嘗て零散な仏造像の残塊が屢々発見されたことや、また龍興寺寺址には距離的に近いことから、『魏書』卷六十崔光伝に記載された「去皇興中(四六七)四七〇)青州七級亦號崇壯、夜為上火所焚」といった落雷で焼け落ちた青州七級大寺の寺址であろうと判断される。この造像は、青州七級寺に所属した奉納物であったことを示すと同時に、このように石製の舟型背光を負う三尊造像碑が往時の寺院堂内に盛んに配置された模様を現実的に想起させるものである。

3 兩京地域(西安と洛陽を中心とする地域)

北朝晩期から唐代にかけて、京城の長安と洛陽には、政府管轄下に仏寺造営活動が未曾有の活気を見せ、また北魏の京城洛陽に造営された龍門石窟の存在は、その時代の仏教文化の繁栄に対して、計り知れぬ重要な役割を果たしたことも言うまでもない。ただ、兩京地域では仏寺の造営活動が最も盛んに行われたと同時に、北周の武帝と唐武宗の兩度の滅法による被害も最も甚しい地域であったため、唐代以前の文献上に仏教寺院関係の

記述が多く示されるものの、現存する遺例が想像以上乏しい点は、仏教美術史研究上に一つの留意すべき事項であろう。まず、これらの出土資料を列記すると、以下の通りである。

- (1) 西安宝慶寺仏殿埽壁内に残存した浮彫石刻造像(隋・唐時代)
- (2) 洛陽永寧寺址の調査及び出土の仏塑像(北魏)、一九七九年―一九九四年調査
- (3) 西安礼泉寺址出土の仏教石刻造像(北魏―隋初)、一九八二年、一九八六年調査
- (4) 河南省滎陽大海寺址出土の仏教石刻造像(北魏―唐代)、一九七六年発見
- (5) 西安正覺寺出土の仏教石刻造像(北周―隋代)、一九八五年発見

(1)の長安城内にある宝慶寺伝存の石造浮彫龕像群が周知の通り、すでに二十世紀初頭に国外に流散し、現在、アメリカ、日本にそれぞれ二十数体が分蔵されている。これらの造像は、早くも一八九三年に岡倉天心の長安実地踏査を契機に学界に知られ、その後、数人の美術、考古学者による先行研究がなされていた。⁽⁶²⁾この寺院址の仏殿磚壁と清初重修の七級磚塔の外壁に嵌込まれた多数の浮彫石仏像龕は、阿弥陀と脇侍菩薩三尊像や、独尊の十一面観音像などが主題として、また、その尊像の背後に見られる後屏式の円型と舟形の光背や、天蓋、蓮弁須弥座などの制作意匠から、これらの造像は八世紀初頭の盛唐初期の代表作であると認められている。しかし、堂塔内の壁面裝飾構成は、すべて明清時代の重修によるものであったため、現時点で当初の状況を明らかにするのは困難である。改めて清代の史料に徴して見ると、『雍州金石記』には、

西安府南門内花塔寺、各種銘讚俱書於石佛座下、諸佛悉在殿之後簷及後殿之前簷。寺僧云、石佛旧在塔内、塔毀重修、不復安塔中、故安於殿前後耳。

とあり、⁽⁶³⁾この龕像群はもとも寺塔内部に配置されたものであったが、仏塔が損毀した際、これら石造像を仏殿の前後に移して、改めて嵌込め直したことがわかる。そして、その具体的な配置場所の詳細について、往日



図二十一 宝慶寺伝来十一面
観音像浮彫

の関野貞博士の調査によると、仏殿前面の三間及び後面中央の間では扉を設け、東西壁にはそれぞれ各三尊仏龕五点、北側の三尊仏龕の左右側には十一面観音立像も配置されていた。〔図二十二〕又北壁入口の左右には各三尊仏龕一面が見られる。仏殿の内部には長方形の平面を呈する仏壇を設けており、東西両側にもそれぞれ三尊仏龕二面があり、併せて龕像十八面が数えられるという。⁽⁶⁴⁾

しかしながら、宝慶寺伝存の龕像群は、当初の配置場所から大きく変更しただけに、それをこの寺の堂塔莊嚴の様様を考える材料とするにはやはり大きな問題となる。ここで、改めて限られた既存史料をまとめて考えると、まず、『唐会要』の記事には、この寺院はもともと長安城内横街の北の光宅坊に位し、儀鳳二年（六七七）、高宗の勅命によって仏舍利骨万粒を入れた石函が発見されたことを発端に、光宅寺として建立された。のちに則天武后の長寿二年（六九三）に七宝台と呼ばれる増塔を造営する際、則天武后の発願によって、官僚と軍人の献納したこれらの供養像が仏殿と増塔に嵌入された、という史実が伝えられている。⁽⁶⁵⁾次に、唐代の美術史料には、光宅寺七宝台に関する記事がみえ、それを並記すると、唐の段成式『寺塔記』巻下には、

宝台甚顯、登之四極眼界、其上層窓下尉遲画、其下層窓下有吳道子画、皆非其得意也。

とあり、また、張彥遠『歷代名画記』卷三には、

光宅寺、東菩提院内、北壁東西偏、尉遲画降魔等變。殿内吳生、楊廷光画。又尹琳画西方變。

とある。更に、朱景玄『唐朝名画録』尉遲乙僧の条に、

又光澤(宅)寺七宝台後面画降魔像、千怪万状。

との記事もみえる。⁽⁶⁸⁾以上取り挙げた史料からは、光宅寺は往日、唐朝の超一流画家の精力的な創作活動によって長安城内に人望を収めた重要な信仰場所となつたことが示されたのである。また則天武后の長安三年(七〇三)銘を持つ王璿、僧德威、蕭元奭造像記の文中に、共に「七宝花台」という場所が言及されたことから、この光宅寺では長安三年(七〇三)の時点で既に則天武后の発願により七宝楼台を完成させていたことは了解されるのである。更に、造像遺品中の唐玄宗開元十二年(七二四)銘の楊思勗造像記(號国公楊花台銘)には、

爰抽淨俸申莊嚴之事也、華簷覆像、盡垂交露之珠、玉砌連龕。

と記されているように、⁽⁶⁹⁾当時の七宝楼台の諸尊像龕は、整然とした形で嵌入されており、龕像の四周は更に華麗な垂幔や宝珠などの装飾図相で覆われたという当時の莊嚴の様相を察知することも可能なのである。いずれにしても、こうした則天武后期に造営された七宝楼台の奉納品であった十数件の造像龕は、盛唐初期における長安寺院で展開していた完成度の高い造像配置の一端を窺わせる遺例として、貴重な参考価値を有するものと言えるのである。

(2)の北魏洛陽永寧寺塔の配置状況については、改めて「発掘報告」中の関連事項を検討してみると、残念ながら本尊を安置した仏殿跡の損毀が最も甚しいため、現状では確実なことが言いにくい、寺域内に確認した南門址の柱間七間、奥行二間の規模と考え併せると、この仏像を配置する寺院の中核である仏殿は、少くとも

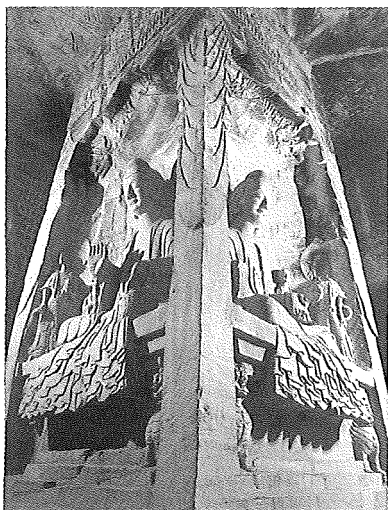
南門より更に広く、恐らく柱間七間、奥行四間に相当する巨大な建物であったと推測される。寺址から出土した多くの寺院関係遺物は、殆ど塔基初層の心礎四周に発見されたもので、その種類は塑像、影塑像または像座、龕飾、壁画残片などが類別されており、塑像の主題は如来、脇侍菩薩、弟子、供養者像の四種類の内容に分けられる。また、造像の組合せは一仏二脇侍の三尊像や、一仏二脇侍二弟子の五尊像を中心に、そのほかに多数の供養者像や礼仏図が本尊と組み併されて配置する跡も認められる。⁽⁷⁰⁾一方、特に注目されるのは、やはり上記した大、中型塑像の出土数を上回る百数件に及ぶ出土状態の良い小型影塑像である。その小型塑像の内容種類はやや複雑で、如来、菩薩、比丘(弟子)、禅僧、僧装と俗装の供養者、胡人、飛天などの様々な主題が見られ、また独尊像を安置するために備えた裝飾台座二十三点も出土している。それによって、現時点で確実に明らかにした寺塔内部の配置構造としては、初層基壇全体の広さは九間の柱間となり、中央部に設けられた四方形中心柱礎の四周には、それぞれ九間に相当する空間を分置して、塔内一周三十六内陣を数える殿堂式回廊が配置されていた。更に中心柱の東、西、南三面にはそれぞれ五龕の壁龕が配されたことも推測される。これらの塑像群は、恐らく上記した塔内中心柱の東、西、南三面の龕内に安置されたもの、あるいは塔の外廊壁面に裝飾された相当数量の影龕内に充填したものと考えられる。この塔内の配置状況をより現実的に想起させる手がかりとして、永寧寺の造営時期よりやや下がった北魏晚期に開鑿された鞏県石窟寺第一窟と、北斉時代の北響堂石窟第四、第七窟中の中心柱龕の構造や、造像配置法からは、具体的な実証資料を見出すことができるのである。⁽⁷¹⁾〔図二二二、二二三〕

(3)の唐長安城内の礼泉坊十字街北に位置する礼泉寺に関する史料は、唐の韋述『西京新記』卷三には、

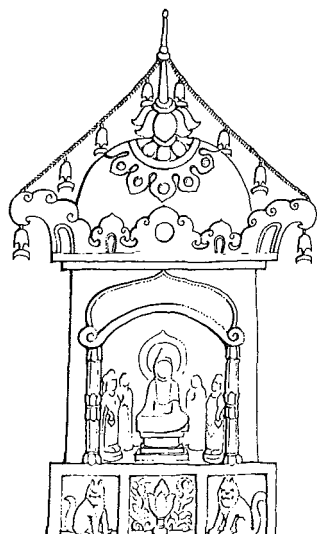
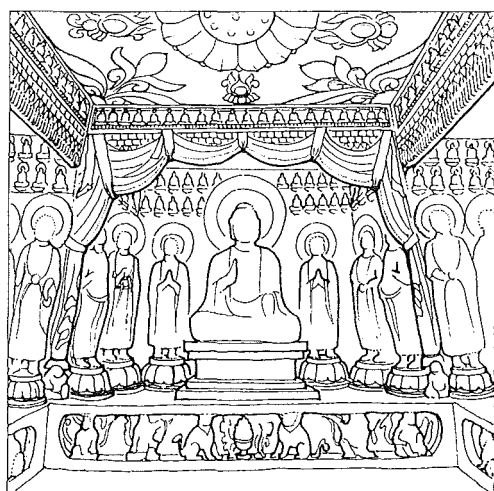
十字街此之四體泉寺、初隋文此置體泉監、以甘泉水、供御(尉)。開皇十三年(五九三)廢監之寺。

と伝えるのみである。⁽⁷¹⁾この寺の歴史沿革については必ずしも明瞭でないが、一九八二年、一九八六年に、この

寺址の域内に唐代窖藏に埋もたれた多数の仏造像、善業泥像、また蓮華文方磚、瓦當などの仏教関係遺物が出土した⁽⁷²⁾。その遺物埋藏の年代下限は唐代にとどまることからして、恐らく礼泉寺は唐武宗の滅法によって廃毀されて、そのまま廃寺となったと考えられる。これら石彫像の中に北魏、北周、隋初の作例が多く含まれているのは、右記した史料にみえるように、隋文帝時代において、当時の仏教信仰の風潮に乗って醴泉監を撤廃して仏寺に改めたことを発端に、前代に残った多くの造像をこの寺に集めていた一要因となったので



図二十二 鞏県石窟第一窟
中心柱西北側

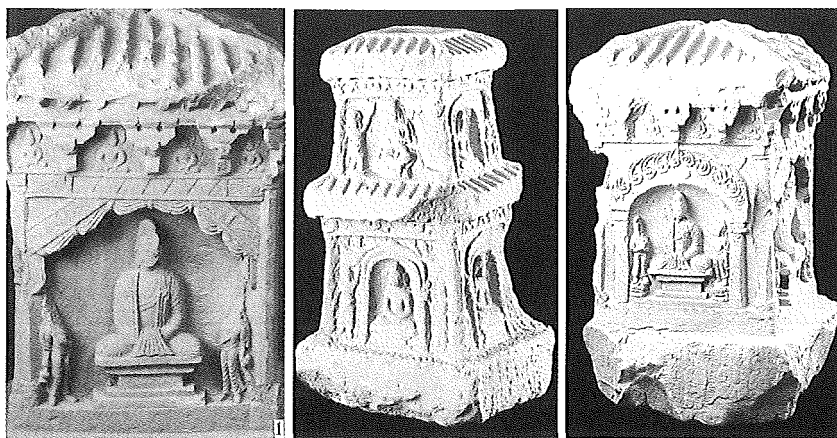


図二十三 北響堂石窟南洞内部(左)、第一窟浮彫仏塔(右)

あろう。特に出土遺品から注目すべきものとして、北魏時期の作とされる屋型石塔仏龕造像は、石像全体が木構塔型にかたどって作られたもので、宝刹、塔檐、塔身、塔基の四部分をなし、塔の四面に巡らせた各斗拱間には千仏で充填し、四面周壁に開かれた仏龕は円型拱龕と盃頂型龕の両形式からなる。また盃頂型龕には盃頂と両側の立柱に鋸齒文と菱文で飾り、柱間に掛けられる綴織の帷幕による莊嚴の意匠もはつきり見え、北魏時期の堂塔内の中心柱仏龕を彷彿させる表現である。幕帳の中に安置されている弥勒像は須弥座に結迦趺坐し、両脇侍菩薩は本尊より比較的小型の姿で北魏以来の古い様式である。(図二十四)

(5)の西安市大南門外冉家村にある正覺寺跡では、一九八五年に、隋大業五年(六〇九)仏弟子姚長華造像銘を持つ如来立像を始めとして、十一件の北周、隋代の如来、観音、供養人及び分体の造像台座が出土した。⁽⁷³⁾この場所が唐長安城朱雀門街東第二街務本坊の南側にある崇義坊の故地に位置することからみて、その出土造像はもととも隋の正覺寺の寺伝遺物であろうと推測された。宋の宋敏求『長安誌』巻七によれば、

(崇義坊内横街之北、拓福寺、乾封二年(六六七)睿宗在藩立、本隋正覺寺。



図二十四 礼泉寺址出土屋型仏龕造像

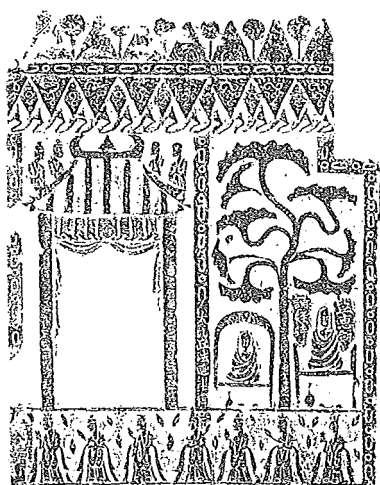
との記事がみえ、また唐の段成式『寺塔記』⁽⁷⁴⁾ 卷下には、

崇義坊拓福寺、本曰正覺、国初毀之、以其地立第、賜諸王、睿宗在藩居之、乾封二年(六六七)移長寧公主佛堂於此、重建此寺。

と、やや詳しい寺の沿革を伝えている。以上の史料を字面通りに受け止めれば、隋代初創の正覺寺は「国初毀之」と示されたように、唐高祖武徳九年(六二六、太宗貞觀元年)、僧侶の賦役逃避の事件が頻発したために施された廢仏令によつて、この寺は多少の被害を受けたものの、唐睿宗が在藩の時にその敷地に居住したことを機縁に、唐皇室に関わる必要な仏寺となつたことが推測されよう。そして、唐高宗の乾封二年(六六七)、一朝に寵愛された中宗と韋皇后から生まれた皇女である長寧公主によつて、ここに仏堂が移転され、拓福寺の寺名として再興されたらしい。この寺の詳細について、改めて『寺塔記』卷下の記事に徴してみると、嘗てこの寺は盛んに仏教美術の製作を行い、幾多の著名な画家が集まつたことや、睿宗、玄宗朝における皇室と関わり深い逸事が目につく。それを記せば、次の通りである。

(拓福寺)長安二年(七〇二)内出等身金銅像一鋪、並九部樂。景龍二年(七〇八)又賜真容坐像。詔、寺中別建聖容院、是玄宗在春宮真容也。(中略)睿宗聖容院、門外鬼神數壁、自内移來。画蹟甚異。鬼所執野鷄、似覺毛起。庫院、鬼子母。貞元中(七八五―八〇四)李真画、往々得長史規矩、把鏡者猶工。寺西南隅、僧伽像、從來有靈。至今、百姓上幡繖不絶。

正覺寺出土の遺物から得られた造像配置に関する情報は少ないが、しかし上記した文献上に見られる隋末、唐朝に盛衰を経たこの寺の皇室の崇仏事蹟及び仏教美術製作への関心を考慮すると、そこで出土した白石製の如来坐像に附した束腰高蓮弁形台座や、高度な技法を駆使して作られた四層複蓮弁葉形文様を持つ白石製束腰仏台座などの寺伝遺品は、今具体的な正覺寺の実情を明らかにしえない現状の中に、盛唐時期に長安寺院内部



図二十五 大海寺出土造像碑左側上部

の構成要素を象徴的に物語っているものとなったのである。

次に、東都の洛陽を少々離れる河南省鄭州市西の滎陽に位置する大海寺の廃寺址で、一九七六年に、唐代の釈迦、弥勒、阿弥陀仏坐像、並びに菩薩像、北魏時代の造像碑など計四十件近くの寺院関係遺物が出土した。⁽⁷⁵⁾

その中に特に提及すべきのは、製作年代の最も古い北魏孝昌元年(五二五)の百八十五人供養者名を銘刻した多龕型交脚弥勒造像碑である。この碑は、正面の円拱形龕の龕額に七尊の化仏を配し、龕頂の左右にはそれぞれ八身ずつの比丘説法供養の図相が刻まれている。龕内には倚坐の主尊交脚弥勒像を中心に置き、観音、勢至両脇侍、二弟子、迦葉と阿難を両側に配する七尊像の組合せである。更に、龕両側には維摩と文殊を伴う数人の合掌して立つ聴法比丘、及び維摩文殊変相の画面が浅浮雕されている。一方、碑身の両側は、寺院坐禅供養の主題で、廡殿頂屋型龕は帷幕を掛け、その中に結趺坐の如来像が安置され、屋頂の両側にそれぞれ二比丘を配し、その隣りには菩提樹下の龕内に対称して比丘坐禅の姿を表わし、龕の下部には横一列の蓮華を持つ供養

天人が飾られており、比丘の両側には「大比丘法延坐禅時」、「比丘惠劍誦経時」との造像題記も刻まれている。
 [図二十五] この碑刻の図相は、北魏時期における堂内諸龕像の配置や、比丘供養時の寺院内部の情景が図像化にされる実例として位置付けるべきであろう。また、出土の唐代造像の中に、唐長慶年(八二〇―八二四)銘を有する六代の菩薩立像、燕王史朝義頭聖二年(七六二、唐代宗広徳元年)銘の阿弥陀坐像一件、及び十一面観音像一件は、独尊の本尊は全身に装身具や細かい衣装表現を持ち、覆弁蓮華座や

束腰蓮華座に直立しており、いずれも等身大、もしくはそれ以上の大型像である。

大海寺の歴史に関する史料上の記載は極めて少ないが、僅かに『滎陽県志』の記事の中に、

大海寺在東郭外、唐高祖為郡守、因太宗患目疾重建。

と記されており、また顧祖禹『讀史方輿記要』卷四七開封道滎陽県の条には、

又県東北四十里有大海寺、李密與隋將張須陁戰、伏兵於大海寺北林間、須陁戰死殂也。

と、隋末、初唐期に寺院にまつわる歴史事件を伝えるのみである。⁽⁷⁶⁾それによって、大海寺は唐高祖李淵の出世に関わる場所で、その後、子の太宗に増築されており、唐皇室初興の栄光を蒙った地であったことが知られる。しかし、寺跡で出土した前述の北魏孝昌元年(五二五)銘を持つ造像碑記からみた百八十五人の僧衆仏事供養の内容や、並びに北宋元豊四年(一〇八二)造像記中の記事を考え併せると、この寺の創建は必ずしも唐代ではなく、少くとも洛陽治世の北魏晚期に溯ることができ、北宋後期の元豊年間(一〇七八―一〇八四)に至るまで、この寺は燈火を絶やすこともなく、なお相当規模の伽藍配置を存続していたことが事実であろうと判断されよう。⁽⁷⁷⁾それと関連して、唐長慶元年(八二二)銘「大海寺上座僧曇誓敬造光相菩薩願国安人樂辛丑九月」とある大海寺の寺名を明示した光相菩薩や、「唐長慶二月十三日弟子蘇清建立石花嚴菩薩」銘を持つ花嚴菩薩立像、並びに長慶紀年銘の天王菩薩及び觀音菩薩立像などの異例の造像主題を示した一連の寺伝献納物は、唐の代宗朝(七六三―七七九)から穆宗の長慶年間(八二二―八二四)にかけて仏教の隆盛を深めた大海寺に施入したものと見て、中晚唐時期に兩京周辺における大乘密教經典の流行に基づいて現われた諸變化觀音像を主題とする唐代密教美術の成立事情を考える上で、極めて貴重な手がかりとなるのである。

4 南方地域(四川省成都を中心とする地域)

南朝では西晋に至るまでに奉仏造寺の活動は寥々たるものであったが、宋、齊兩朝を経て梁朝の武帝時代になると、国都の建康を中心に未曾有の仏教繁栄の時期を迎えた。その中に、長江による建康と直結する内陸部の蜀地四川地域は、南朝と北朝の両勢力が衝突する場所でありながらも、梁武帝の深い益州経略によって、徐々に衆目を集める仏教文化の集積地として発展してきたのである。梁武帝時代の四川仏教美術の発展を考える際、武帝に派遣された益州刺史の数人によって果たした役割が大きかったことは周知の通りであるが、改めて史料に基づいて略述すると、第二代の武帝の兄蕭懿の子である西昌侯蕭淵藻(在位五〇三―五一〇)⁽⁷⁸⁾は仏教への帰依が厚く、嘗て石造仏像を施入したことがあり、武帝の子である第三代の始興王蕭憺(在位五一〇―五一四)⁽⁷⁹⁾は、天監十三年(五一四)に吐谷渾国王の乞いを受け入れて益州で九層の仏塔を建立した。また第四代の鄱陽王蕭恢(在位五一四―五一八)は、亡母費太妃のために益州の地に孝愛寺を造営し、その寺院の詳細について、唐代の仏教史料には、

寺旧在東、逼於苑囿、又是鄱陽王葬母之所。王既至孝、故名孝愛寺。宣明移就今処、供養無闕。(中略)至大業(六〇五―六一八)、改爲福勝寺。

と伝えられている。⁽⁸⁰⁾そして、第八代の蕭恢の世子である鄱陽王蕭範(在位五二六―五三七)は、蜀地赴任二年後の中大同元年(五二九)に、成都の浦安寺に至って石造釈迦像を奉納し、この造像は早くより一九三七年に同廃寺址で発見された。⁽⁸¹⁾このように、梁朝の帝室一族の益州刺史達が武帝の命を受けて州都の成都に赴任する際に、この地の仏法を積極的に振興しようとして、また蜀地の西端に接する青海地方を支配している仏教を篤く信仰する吐谷渾との文物的往來を結んだことで、益州には京城の建康を始めとして、涼州、南アジア、西域の諸周

辺地域から伝えてきた仏教文化が頻りに移植され、蔚然として仏教興起の氣運をかもしていたのである。⁽⁸²⁾

南朝出土の造像実例としては、これまでに南京附近の寺院址で発見された僅かに数体の残像と、万仏寺址出土の石造像のみしか知られていないが、最近、新補足資料の相次ぐ発見によつて、漸く南朝仏教美術の問題解決の糸口が開かれたと同時に、当時の寺院内部の造像配置情況についても知ることできるようになったのである。その重要な発見は、以下の通りに挙げられる。

- (1) 成都万仏寺出土の「石刻仏造像(南朝梁→唐代)、一九三七年、一九五三年発見
- (2) 成都市西安路出土の「石刻仏造像(南朝齊→梁)、一九九五年発見
- (3) 成都市商業街出土の「南朝仏造像(南朝齊→梁)、一九九〇年発見

(2)と(3)の成都市内の繁華地で、それぞれ九件ずつ出土された石造像は、共に人為的に地下窖藏に埋納したものと確認されたが、その出土地点は寺跡かどうかに関しては、現時点で全く情況不明である。

(1)の万仏寺は、現在の成都市西北万仏橋附近に位置し、既に明末から湮滅したため、何時何人によつて建立されたかは判然としないが、一九三七年に出土した中大通元年(五二九)銘を持つ釈迦立像にみえる銘記に「鄱陽王世子西止於安浦寺敬造釈迦像」との字句から、南朝の梁武帝時代に安浦寺と呼ばれた寺院とするのは学界の通説である。⁽⁸³⁾ また、一九五一年に万仏寺跡出土の唐宣宗大中元年(八四七)銘記を持つ尊勝陀羅尼經幢に「於淨衆寺再建立尊勝幢一所」と記される碑文の内容によつて、唐代にはこの出土場所が淨衆寺の寺地であつたことも推察される。⁽⁸⁴⁾ 唐代の淨衆寺に関する文献上の記事が多少残されているが、嘗て成都の大聖慈寺と同様に、会昌の廢仏の折にこの寺が大きな被害に見舞われたものの、廢毀までに至らずに、間もなく唐皇室の力で復興されたようである。このことについて、宋の黄休復『益州名画録』範瓊の条に、会昌滅仏後の淨衆寺の復興情況について、次のように触れられている。⁽⁸⁵⁾

会昌年除毀後、餘大聖慈一寺得存、洎宣宗皇帝再興佛寺、三人（範瓊、陳皓、彭堅）於聖壽寺、聖興寺、淨衆寺、中興寺、自大中（八四七―八五九）至乾符（八七四―八七九）筆無暫輟。

そして、唐代以降の万仏寺の状況について、『四川通志』卷三八には、

宋明浄因寺、明改為万仏寺。

とあり、また、明の天啓年（一六二一―一六二七）に成書した『成都府志』芸文志に収録される「重建万佛寺碑記」には、

僧之言曰浄因寺俗呼万仏寺、近又易佛為福也。（中略）洪武中（一三六八―一三九九）蜀猷王就国、宮未竣、多遊其地、遺像俱在、時猶号竹林寺。（中略）正徳中（一五〇六―一五二二）寺燹於流賊。

と伝えられている。⁽⁸⁶⁾それによつて、浄衆寺は宋代に浄因寺と呼ばれ、明代になつて万仏寺と改称されており、歴代にわたつて寺院に奉納された石造像は少くとも明初の洪武年に至るまで残存していたことがわかる。その後、「寺燹於流賊」と記されたように、恐らく明武宗の正徳年間（一五〇六―一五二二）に発生した数年間に続いた順天王藍廷瑞の四川民衆叛乱によつて、この寺は決定的な凋落を見せたのであろう。

そして、万仏寺造像の出土状況については、清の光緒八年（一八八二）、その仏寺跡とされる場所では初めて造像が発見され、当時の様子について、清の王懿榮「天壤閣筆記」には、

鄉人掘土、出殘石佛像、大者如屋、小者卷石、皆無首或有首無身、無一完者。（中略）凡百餘。乃揀得有字三、一元嘉、一開皇、一無紀年。

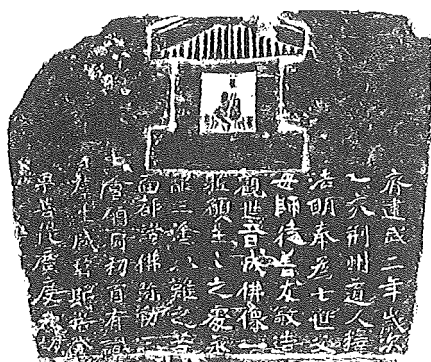
と記されている。そのうち、王懿榮の右記した宋元嘉二年（四二七）石造像は、出土後間もなく海外に流出し、いまだに所在不明となつて⁽⁸⁷⁾いる。その後、一九三七年に、中大通元年（五二九）釈迦像や北周保定年（五六一―五六五）阿育王像などの十二件の造像が出土され、更に、一九五三年、一九五四年の二年間に、仏身、仏頭、菩



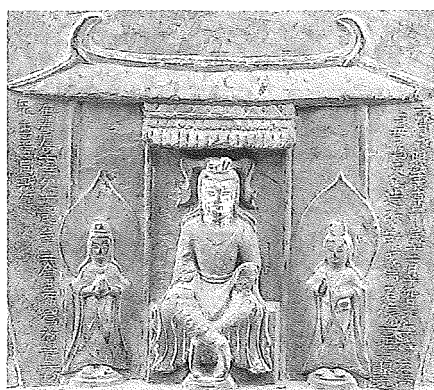
図二十六 成都万仏寺址出土梁中大同三年銘観音菩薩像(左)、中大通五年釈迦像(右)

薩像、伎楽天像、須弥座などの残断の遺品二百点が発掘されたのである。しかし、このように従来の南朝仏教美術の発展水準を立証可能にする極めて重要な造像遺例が出現したにも拘わらず、ほぼ半世紀にわたって、出版物としては、前掲注の劉志遠、劉廷壁編の『成都万仏寺石刻芸術』という通常市販の黑白写真付の図録しか刊行されておらず、しかも同書の掲載写真と資料上の事実関係の確認が十分のものではなかったことも、最近になって度々指摘されている⁽⁸⁸⁾。こうした状況を鑑み、現存する遺品を改めて確認する作業は近年、所蔵者の四川省博物館によって行われるに及んで、またその蔵品の一部が「中国国宝展」で一般公開されたことをも契機に、成都出土の石刻造像は久方ぶりに学界の注意を引いたのである⁽⁸⁹⁾。

成都万仏寺、並びに西安路、商業街出土の梁代中期の一仏四菩薩四弟子二力士を並立する多尊型の造像、謂る「群像式」と呼ばれる造像は確実な紀年銘のあるものとして、万仏寺出土の梁普通四年(五三〇)康勝造釈迦像、梁中大同三年(五四八)觀世音菩薩造像、梁中大通五年(五三三)造釈迦文石像、または西安路出土の梁中大通二年(五三〇)比丘晃藏造釈迦像などが挙げられるが、〔図二十六〕これら一連の造像の構成



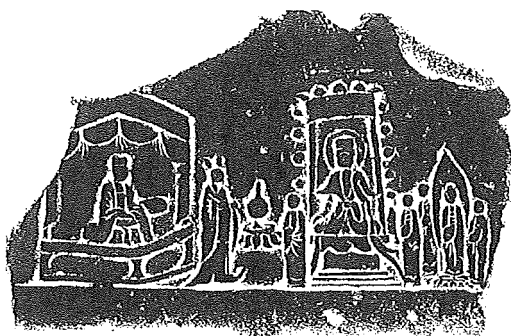
図二十七 成都商業街出土斉建武二年
銘造像裏側浮彫



図二十八 成都西安路出土斉永明八年
銘造像裏側浮彫

はいずれも諸尊像を前後二列で並列させ、造像の中央には主尊と四脇侍菩薩を置き、前後列には主尊と菩薩を挟んで、両力士や、四弟子をそれぞれ有機的に配置される。また力士と弟子は低肉彫の手法で彫り出されたものに對し、主尊と菩薩は円彫で作られて、極めて統一的な製作意匠を示しているのである。そのほかに、八菩薩両力士像や、二仏並坐像を主尊とする五菩薩二弟子二力士像、四弟子、四力士と三尊の如来像を組合せする多尊型像などは、いずれも成都以外の地域に類例を見ない独特の造型である。更に、これら造像に備える台座の裝飾意匠を見てみると、正面には博山爐を挟んで獅子と象を世話する童子像や、供養天人などが浮彫で表わされており、造像の背屏にも飛天火焰文や化仏などの細緻な圖案を陰刻で彫り出して、諸尊像とは巧みに組織されている。こうした成都地域に出現した北朝より先行する多尊型の造像配置の形態は、既述した北朝時期に中原仏寺内の石造仏像の配置や、或いは隋唐時期に多く見られる仏殿内部の群像式の配置方式に對して、何ら

かの図像的情報発信の役割を果していた可能性は極めて高いと思われるのである。この意味では、成都地域の造像配置形態上の特徴としては、中原地方と比べて、成都の「より堂内莊嚴的表現方式」ということが言えるのか



図二十九 成都西安路出土南朝造像裏側浮彫

も知れない。

また、成都商業街出土品の中には、仏像を屋殿型龕に配置する具体的な図像を刻んだ作例が見られる。斉の建武二年（四九五）荊州道人釈法明造観世音成仏造像碑は、残断する舟型光背の背面には、浅浮雕で小型の仏殿形屋龕を彫り出し、龕内には長方形の仏壇上に交脚菩薩が配置されている。⁽⁹⁰⁾（図二十七）特に興味深いことは、その屋形龕の下部には、「荊

州道人釈法明」の発願文から、当時、京城建康周辺の荊州僧人であった釈法明が南斉年間に入蜀して、建康から益州への造寺奉仏の情報伝達が行われたことは窺われるのである。⁽⁹¹⁾ また西安路出土の斉永明八年（四九

〇）比丘釈法海造弥勒成仏像の発願銘を有する一仏二菩薩石造像の裏には、交脚弥勒像と脇侍二菩薩が浮り彫りにされると同時に、その身後に

の特有の中国風鵝尾を飾り、屋内の中央には内陣一間の柱間正面に本尊が置かれ、その頭上に帷幔宝帳が掛けられ、台座の両側に帳柱も配されている。弥勒本尊は方型の台座に交脚趺座し、両側の脇侍菩薩が主尊より小さな立像で、身後に舟型光背を負い、円型台座の上に侍立する。この図像は中原北方各地に普遍的に見られる漢民族化の私宅仏寺の荘嚴の諸要素を如実に記録したものである。〔図二十八〕また、同じく西安路出土の三仏並坐石残像の光背の裏に浮彫された維摩変相図にも、画面の中央に博山爐を挟んで、左側に低牀型の帷帳の中に趺坐する維摩詰と、右側に宝珠裝飾を飾る龕扉に対坐する文殊を伝統的な手法で表現し、文殊像が束腰須弥座に坐し、龕扉の上端には華蓋

が掛けられており、その両側には舟型光背を負う菩薩像及び四人の比丘を並列し、一方の維摩詰の牀前にも供養仕女一人も配置されている。〔図二十九〕こうした維摩變相図のような配置方式は南北朝時期において、実際の仏殿内部の空間にも同様の配置構成で行われていたことが、これらの図像より見出されるのである。

小 結

以上、近年に出土した散発的な資料をまとめることによって、これまでにあまり明確にされなかった魏晉南北朝、隋唐時期において中国各地に盛んに行われた造寺活動の中で、仏堂内の造像配置や、堂内荘嚴の様相を実証的に検討してきた。基本的に考察の対象にしようとするものが、出土仏造像そのものの寺院での配置情况、あるいは堂内に配置するために造像が備えられる特殊な造型意匠、更に幾つかの図相からみた様々な堂内を荘嚴する具体的な作例などである。それは本稿の主な関心事であり、難点でもあった。以上の甚だ不十分の検討から理解されるのは、次の諸点である。

第一は、魏晉南北朝初期において、仏寺の主な伽藍配置は多層の樓塔を中心に行われていたが、その堂内の造像配置は石窟寺院の中心柱龕を模倣する形態が多く見られており、洛陽治世の北魏中期からは徐々に仏殿を伽藍配置の主体とする傾向に転換することになる。それによって、これまでに仏殿の限られた堂内の使用空間が大幅に広くになったため、堂内に設けられた仏壇上の仏像の配置がより自由に行われ、造像の配置方式も、仏堂内の壁面に描かれる壁画、仏帳、台座などの堂内荘嚴と共に飛躍的に発達されるようになったのである。

第二は、南北朝時期において、中国各地に造像使用素材上の相違点が文献と実物の両面からも多く見受けられているが、洛陽や、建康の京城地域において伝統的に外国伝来の経像を寺伝本尊とするものを除いて、南北

方を問わず、特に北方の寺院の奉納本尊として基本的に石造像で製作されたものが多いのは、これまでに数々の出土資料と史料記載によって実証されたのである。また、各地の寺跡で出土した造像は通常、個人発願の施入献納物と思われるものが確かに多く存在しているが、その中で含められている若干の大型の石造像が寺伝の本尊、或いは本尊の脇侍としたものも認めるべきであり、この問題について、今後も既出の資料によって詳しく鑑別し、再考察をする必要があると思われる。

第三は、本稿に取り挙げてきた造像遺例から見られるように、寺院内における仏壇上の造像配置の形態は、石窟寺院内の配置形式とは極めて類似し、大型光背を負った主尊を中心に、脇侍菩薩や弟子、力士などの尊像を左右対称の位置に置いて組織的に行われていたが、石窟寺の配置より更に手法の多様化を呈するのが一つの特徴である。こうした仏壇上になるべく多尊の奉納仏をあざやかに配置する伝統的意匠は、唐、五代に至るまでも基本的には変わっていない。また寺の施入品とした個人的な奉納像は、金堂内外の壁間をびっしり充填し、あたかも龍門石窟北魏期の洞窟にみる小型龕像を充填する壁面莊嚴のような装飾構成であったと想像されよう。このように、尊像配置するためにできる限り広い堂内空間を設ける北魏以来の仏殿設計理念上の変化があったからこそ、その時代に現われた造像製作の繁栄を促する一起因となったと言えるのであろう。

第四は、これらの遺品の出土場所は当時の製作地であったかどうかについてはなお明らかでない点が多い。しかし、小型造像が地域間に移動しやすい特徴にあるのに対して、大型の窖藏埋藏地点が基本的に、当時の寺院に附属する造像製作機構の所在地であったことは、既に曲陽修德寺、青州龍興寺と興国寺、または成都の万仏寺などの調査によって判明されたのである。また、これらの寺院に集まってきた仏師達により精力的に製作された個々の仏造像は勿論、屋形龕、仏帳、台座、仏寺図、說法図などの図相もその仏寺内部の様子をイメージにされたものと考えるべきであり、これらの図相から堂内莊嚴に関する情報の伝達が確かな形で現われたこ

とは、以上の考察によつて、ある程度の検証が出来たのではないかと思われる。

注

- (1) 馮漢驥「成都万仏寺石刻造像」(『文物參考資料』一九五四年第九期)、劉志遠、劉廷璧編『成都万佛寺石刻芸術』(中国古典芸術出版社、一九五八)。また近年、成都地方に新たな南朝銘を持つ石造像が出土した。成都市文物考古工作队、成都市文物考古研究所「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」(『文物』一九九八年第十一期)、張肖馬、雷玉華「成都市商業街南朝石刻造像」(『文物』二〇〇一年第十期)。
- (2) 羅福頤「河北曲陽県出土石像清理工作簡報」、李錫経「河北省曲陽県修徳寺遺址発掘記」(『考古通訊』一九五五年第三期)。楊伯達著、松原三郎訳・解題「埋もれた中国石仏の研究——河北省曲陽出土の白玉像と編年銘文」(東京美術、一九八五年)。
- (3) 中国社会科学院考古研究所「北魏洛陽永寧寺——一九七九—一九九四年考古発掘報告」(中国大百科全書出版社、一九九六)。
- (4) 山東地域に出土造像について後出注(50)、(51)、(53)、(56)、(57)、(58)、(60)の発掘報告や論文を参照。
- (5) 中国における初期仏寺の問題を扱った論文は田中豊蔵「中国仏寺の原始形式」(『美術研究』第十六号、昭和八年)。村田治郎「中国伽藍配置の溯源」(『仏教芸術』第十六号、昭和二十七年)、「中国の初期伽藍配置」(日本歴史考古学会編『日本歴史考古学論叢』(吉川弘文館、昭和四十一年)などがある。
- (6) 百橋明穂「古代寺院における堂内壁画莊嚴の系譜」(『秋山光和博士古稀紀念論文集』、便利堂刊、一九九一)。
- (7) 宿白「東漢魏晉南北朝佛寺布局初探」(『慶祝鄧廣銘教授九十華誕論文集』所収、河北教育出版社、一九九七)、「隋代佛寺布局」(『考古與文物』、一九九七年第二期)、傅熹年「中国早期佛教建築布局演變及殿内像設的布置」(『傅熹年建築史論文集』所収、文物出版社、一九九八)。
- (8) そのほか、『後漢書』卷三七、陶謙伝にも、『三国志』の内容を若干書き改められた記事がみえるが、それを記せば、

「大起浮屠寺、上累金槃、下為重樓、又堂閣周回可容三千許人、作黃金塗像、衣以錦綵」とある。

- (9) 〔宋〕志磐『佛祖統記』卷三五に「興平二年、下邳相竿融起佛祠、課人誦經浴佛設齋、時会有五千餘人」とあるが、村田治郎氏は『中国の初期伽藍配置』（前注〔5〕参照）において、この史料記述の矛盾点を指摘し、竿融の仏寺の造営は初平二年（一九一）以降、初平四年（一九三）以前の間のこととする。また藤田豊八氏は、それを中平六年（一八九）から初平四年（一九三）の間と推定されている。（藤田豊八「仏教伝来に関する魏略の本文につきて」、『東西交渉史の研究』西域篇、荻原星文館、一九四三）。

- (10) 水野清一「中国における仏像の始まり」（『仏教芸術』第七号、一九五〇）。

- (11) 小杉一雄『中国美術史』仏教美術篇（南雲堂、一九八六）。

- (12) 〔後漢〕牟子『理惑論』一卷（『中国佛教思想資料選編』第一卷所収、中華書局、一九八一）。

- (13) 「仏図」の意味について、塚本善隆訳注『魏書・釈老志』（『東洋文庫』五一六、平凡社刊、一九九〇）に解説がある。

- (14) 『魏書』卷百十四、釈老志（中華書局点校本）。

- (15) 『魏書』卷七五、爾朱兆伝（中華書局点校本）。

- (16) 〔梁〕僧祐『出三藏記集』卷十五、道安法師伝。

- (17) 〔北魏〕楊衒之『洛陽伽藍記』卷第一、城内〔範祥雍校注本、上海古籍出版社、一九七八〕。

- (18) 〔北魏〕酈道元『水経注』卷十六、穀水（陳橋驛校注本、杭州大学出版社、一九九九）。

- (19) 同注〔17〕前掲書卷一、卷二、卷三、卷四。

- (20) 王振国「龍門路洞調査報告」（『中原文物』二〇〇〇年第六期）。

- (21) 〔唐〕道宣『統高僧伝』卷十、釈法瓊伝（『大正蔵』卷五〇、史伝部二）。また釈僧朗の事蹟について、〔梁〕慧皎『高僧伝』卷五、晋泰山崑崙嚴竺僧朗伝、または〔北魏〕酈道元『水経注』卷八、済水の条参照。なお、宮川尚志『六朝史研究』（宗教篇）第十章、五胡十六国と泰山の竺僧朗教団（平楽寺書店、一九六四、京都）には詳細な考察がある。

- (22) 注〔21〕前掲書卷二五、釈僧意伝。

- (23) 王建造「山東濟南市神通寺殿堂遺址的清理」(『考古』一九九六年第一期)。荆三林、張鶴雲「神通寺史跡初步調查記略」(『文物參考資料』一九五六年第十期)。
- (24) 注(23)前掲発掘報告の結語部分を参照。
- (25) 〔梁〕慧皎『高僧伝』巻五、晋長安五級寺釈道安伝(湯用彤校注本、中華書局、一九九二)。また酈道元『水経注』巻二八沔水の条には「沔水、又東過襄陽縣北、(中略)又北逕檀溪、謂之檀溪水、水側有沙門釈道安寺、即溪之名、以表寺目也」との記事もある。
- (26) 〔唐〕道宣『律相感通録』(『大正蔵』巻四五、諸宗部二)。
- (27) 〔唐〕道宣『関中創立戒壇図経並序』一卷(『大正蔵』第四五巻、諸宗部二)。
- (28) 田中淡「隋・唐時期の建築」(『世界美術大全集』東洋編四、隋唐、小学館、一九九七)所収寺観と道観解説の項を参照。
- (29) 祁英濤、柴澤俊「南禅寺大殿修復」(『文物』一九八〇年第十一期)。
- (30) 周到「劉根造像」(『河南文博通訊』一九七八年第三期)。
- (31) 〔唐〕釈道世『法苑珠林』巻三七、敬塔篇興造部(『大正蔵』巻五三、事彙部七)。
- (32) 〔清〕王昶『金石萃編』巻三五。
- (33) 〔梁〕宝唱『比丘尼伝』巻一、建福寺道瓊尼伝四(『大正蔵』巻五〇、史伝部二)。
- (34) 戴逵の事蹟については、蜂屋邦夫「戴逵について——その芸術、学問、信仰」(東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』第七七冊、昭和五四年)の中に、戴逵を全面的に考察する論考が発表された。また洪患鎮「戴逵」(中国画家叢書所収、上海人民美術出版社、一九八八)は戴逵の事蹟に関する早期の研究として挙げられる。
- (35) 〔梁〕慧皎『高僧伝』巻十三、釈慧立伝にも「至晋興寧中啓乞陶处以為瓦棺寺、(中略)有戴安道所制五像及戴顓所治丈六金像」との記事がある。
- (36) 中大四年の年号は存在しないが、梁の普通四年(五三三)か、中大通四年(五三三)か、いずれかの誤記であろう。

(37) (魏) 酈道元『水經注』卷十三、潞水(陳橋驛点校本、上海古籍出版社、一九九〇)。

(38) 注(17)前掲書卷一、長秋寺の条。

(39) 『北齊書』卷四、帝紀第四文宣紀高洋(中華書局点校本、一九七二)には、「天宝九年(五五八)八月、先是癸丁匠三十餘万、營三台於鄴下、因其旧基。而高博之。大起宮室及遊豫園、至是三台成。改銅爵曰金鳳、金獸為聖鷹、冰井曰崇光」とある。

(40) (清) 錢大昕『潜研堂金石文跋尾』二十卷(潜研堂全書本)。なお、大興聖寺史及び胡皇后之事蹟について、諏訪義純『中国中世仏教史研究』(大東出版社、昭和六三年)第四節、「鄴都仏寺考」に詳細な考察がある。

(41) 注(2)羅福頤「簡報」参照。

(42) 注(2)李錫経「発掘記」参照。ちなみに、修德寺造像の埋藏時期と動機に関しては、羅福頤、李錫経両氏は、造像紀年銘の下限を唐天宝十一年(七五二)として、その四年後に安史の乱が勃発して、曲陽は唐軍と叛乱軍との激戦の最前線となったことから、寺内造像の毀壊と埋藏がこの時期の戦乱に関連したものと推測されている。

(43) 曲陽修德寺出土の造像は北京故宫博物院、河北省考古研究所及び中国歴史博物館に分蔵されているが、北京故宫博物院の収蔵品のみが特別陳列の形で展示されている。

(44) 河北臨漳県文物保管所「河北鄴南城附近出土北朝石造像」(『文物』一九八〇年第九期)。

(45) 沈銘傑「河北省景県出土北朝造像考」(『文物春秋』一九九四年第三期)。

(46) 鄭紹宗「唐県寺城澗村出土石刻造像」(『文物春秋』一九九〇年第三期)。その埋藏時期に関して「調査報告」には、出土造像の制作年代の下限を北齊天宝四年(五八八)として、または初唐時期の造像も含まれ、造像の表面にみえる人為的損壊も激しいことから、造像の埋藏は北周武帝、もしくは唐武宗の毀仏滅法によるものと持論する。

(47) 程紀中「河北藁城県発見一批北齊石造像」(『考古』一九八〇年第三期)。

(48) 邯鄲市文物保管所、蜂々礦区文物保管所「河北邯鄲鼓山常楽寺遺址清理簡報」(『文物』一九八二年第十期)。

(49) 常楽寺の寺史を辿る金碑の碑文は、嘗て清の畢沅『中州金石記』卷五(經訓堂叢書本)には全文の抄録が行われたが、

この碑石の所在は今回の調査によつて初めて確認された。なお、この金碑の内容は、曾布川寛「響堂山石窟考」(『東方学報』第六三冊、一九九〇)に、北響堂三大窟の造営年代に関する考察の基礎史料として取り上げられている。

(50) 山東省博興県文物管理所「山東博興龍華寺遺址調査報告」(『考古』一九八六年第九期)。

(51) 同(50)前掲報告及び山東省博興県文物管理所「山東博興県出土北朝造像等佛教遺物」(『考古』一九九七年第七期)。

(52) 丁明夷「談山東博興出土的銅佛造像」(『文物』一九八四年第五期)。

(53) 諸城市博物館「山東諸城發現北朝造像」(『考古』一九九〇年第八期)、杜在忠「山東諸城佛教石造像」(『考古學報』一九九四年第二期)。

(54) また、前掲「発掘報告」には、既述した兩次の調査発掘のほか、諸城市内にある古青雲寺址や、南郊に位置する漢魏の故城址(古城子村)、または諸城の南門外には、大量の北朝晩期に人為的に破壊された石造残像が出土したことから、それがこの地域における北周武帝の滅仏政策とは関連している、との指摘がある。

(55) 村田靖子「仏像の系譜——ガンダーラから日本まで」(大日本絵画、一九九五)第六章。

(56) 惠民県文物事業管理处「山東惠民出土一批北朝佛教造像」(『文物』一九九九年第六期)。

(57) 東営市歴史博物館・趙正強「山東廣饒佛教石造像」(『文物』一九九六年第十二期)。ちなみに、広饒出土の造像は永寧寺造像碑を除いて、確実な紀年銘を有するものが殆どないため、その制作時期が明らかにされていない。ただ、百冊、段家、皆公寺の諸造像碑及び張郭造像碑は全体的制作様式上から見て、前掲「発掘簡報」が「北朝中晩期」の作と推測されている。また、その制作時期を西歴五二〇年代後半から同三十年代にかけたものとする見方もある。岡田健「山東歷城黃石崖造像」(『美術研究』第三六六号)。

(58) 夏名采、莊明軍「山東青州興国寺故址出土石造像」(『文物』一九九六年第五期)、山東省青州博物館「青州龍興寺佛教造像窖藏清理簡報」(『文物』一九九八年第二期)。

(59) 夏名采、王瑞霞「青州龍興寺出土背屏式佛教石造像分期初探」(『文物』二〇〇〇年第五期)。

(60) 青州市博物館「山東青州發現北魏彩繪造像」(『文物』一九九六年第五期)。

(61) この造像は、東京国立博物館で開催した「中国国宝展」に出品されたことがあり、『中国国宝展』図録(東京国立博物館編、二〇〇〇、東京)には清晰的な図版と若干の作品解説がある。

(62) 宝慶寺龕像群の発見及び研究史については、福山敏男「宝慶寺派石仏の分類」(『仏教芸術』第十号)冒頭の記述に詳しい。又、その先行研究として、上記する福山論文のほか、杉山二郎「宝慶寺石仏研究序説」(『東京国立博物館紀要』第一三三号、昭和五二年)が挙げられる。

(63) 〔清〕王昶『金石萃編』卷七五に『雍州金石記』の徵引文「號国公楊花銘並序」。

(64) 関野貞、常盤大定『支那仏教史蹟』第一卷評解。

(65) 近年、小野勝年の雄篇である『中国隋唐長安・寺院史料集成』史料編に広く収録されている長安城内の寺院記録の中には、宝慶寺の寺史を窺わせる史料が含まれている。

(66) 『唐会要』卷四八、義釈教下、並びに『長安志』卷八には「光宅寺、儀鳳二年、望氣者言、此坊有興氣。勅令掘得石函、函内有佛舍利骨万餘粒、遂立光宅寺。武太后、始置七宝台、因改寺額焉」とある。

(67) 〔唐〕段成式『酉陽雜俎』続集卷五、寺塔記上(方南生点校本、中華書局、一九八一)。

(68) 〔唐〕朱景玄『唐朝名画録』神品、尉遲乙僧の条(于安瀾編『画品叢書』所収、上海人民美術出版社、一九八二)。

(69) 同注(63)前掲書。

(70) 注(3)前掲発掘報告、第四章「永寧寺遺址考察的学術意義試析」を参照。

(71) 福山敏男「校註兩京新記卷第三及び解説」(『福山敏男著作集』六「中国建築と金石文の研究」所収、中央公論美術出版、昭和五八年)を参照。なお、『兩京新記』の記事を資料源とした〔宋〕宋敏求『長安志』卷十、〔清〕徐松『唐兩京城坊考』卷四、並びに『長安県志』卷二には共に「開皇十二年」に作る。

(72) 王長啓「礼泉寺遺址出土佛教造像」(『考古與文物』二〇〇〇年第二期)。

(73) 韓宝全「隋正覺寺遺址出土的石造像」(『考古與文物』一九八七年第六期)。

(74) 〔宋〕宋敏求『長安志』卷七(文淵閣四庫本、史部三四五、地理類)。

- (75) 河南省鄭州市博物館「河南滎陽大海寺出土的石刻造像」(『文物』一九八〇年第三期)。なお、久野美樹『中国の仏教美術』(東信堂、一九九九)唐代の章には、大海寺址の出土造像に関する若干の解説がある。
- (76) 〔清〕顧祖禹『讀史方輿紀要』卷四七、開封道滎陽縣(上海書店出版社刊、一九九八)、この史料に記している「県東北四十里有大海寺」とある記事については、鄭州市博物館の調査によると、「四十里」とは実際の四里の誤りである。(注(75)前掲調査報告を参照)。
- (77) その出土造像の中では、「滎陽鎮郭下清信弟子郭崇恭為考妣及全家(中略)発願恭造行化釋迦牟尼佛一尊、時大宋元豐四年(一〇八二)記」とある座上供養銘を刻んだ釈迦仏立像一件があり、銘記の中に、また「奉於大海寺王像院衆僧伝法堂」という具体的に奉納場所を明記した字句が見られる。注(75)前掲「調査報告」掲載造像記図版二三を参照。
- (78) 李裕群「試論成都地区出土的南朝佛教石造像」(『文物』二〇〇〇年第二期)に附記した游寿「梁天監五年造像跋尾」(『圖書月刊』第三卷第一期、一九四三年)を参照。
- (79) 『梁書』卷五四、諸夷・河南王伝には「天監十三年、(吐谷渾)遣使獻金裝馬瑙鐘二口、又表於益州、立九層佛寺、詔許之」とある。
- (80) 〔唐〕道宣『統高僧伝』卷二三、智玄伝。
- (81) 注(1)劉志遠・劉廷璧前掲書附図八及び本文解説の項を参照。
- (82) 梁武帝期における益州刺史の成都経略の事蹟及び奉仏活動について、諏訪義純「梁武帝の蜀地経略と仏教——益州刺史の任免を中心として」(『中国南朝仏教史の研究』第十章)には既存史料に基づいて詳細な検討がある。
- (83) それに関連して、最近、四川大学博物館に収蔵されている梁中大通四年(五三三)銘を持つ釈迦像が公表され(霍巍「四川大学博物館収蔵的阿尊南朝石刻造像」、『文物』二〇〇一年第十期)、同造像背後に刻まれた発願銘には「繁東郷齊建寺」とある地名と寺名が見られる。これは梁の安浦寺との関連について知る余地がないが、南朝における成都附近の寺院関係資料として重要であろう。
- (84) 注(1)劉志遠・劉廷璧前掲書解説の項及び挿図三を参照。

(85) 『宋』黄休復『益州名画録』卷上(中国美術論著叢刊本、一九六四)。なお、唐代成都寺院における仏教美術の展開について、拙稿「五代における西蜀寺観壁画に関する一考察——成都大聖慈寺の絵画史料をめぐって」(上)「範成大『成都古寺名筆記』訳注」(下)『京都橘女子大学研究紀要』第二六、二七号)の中で検討を行った。

(86) 注(一)劉志遠・劉廷璧前掲書解説の項を参照。

(87) 『王懿榮集』(齊魯出版社、一九九八)所収。なお、宋元嘉二年造像について、劉志遠・劉廷璧(注(一)前掲書)の解説附図版三十一、三十二及び劉廷璧の報告(『文物參考資料』一九五五年第三期)には、この像は王懿榮により国外に転賣され、国内には、広倉書屋刊の『芸術叢編』二十期図録の中に影印拓本一枚が掲載された、と説明されているが、それ以上の詳細は明らかでない。

(88) 李裕群「試論成都地区出土の南朝佛教造像」(『文物』二〇〇〇年第二期)及び袁曙光「四川省博物館藏万佛寺石刻造像整理簡報」(『文物』二〇〇〇年第一期)、また宿白「青州龍興寺窖藏所出佛像的幾個問題——青州與龍興寺之三」(『文物』一九九九年第十期)の篇末には、同書の問題点について言及している。

(89) 万仏寺造像の整理報告は、注(88)前掲袁曙光簡報参照。なお、東京国立博物館『中国国宝展』図録(朝日新聞社、平成十一年)の中には、十一件成都造像の精彩な図版が掲載されている。

(90) 張肖馬・雷玉華「成都市商業街南朝石刻造像」(『文物』二〇〇一年第十期)。

(91) 齊建武二年(四九五)造像銘にみえる釈法明の事蹟について、『梁』慧皎『高僧伝』卷十二「齊上定林寺超辯伝」に附記した記事があり、それを記せば「時有靈根釋法明、祇洹釋僧志、益州釋法定、並誦經十餘万言、疏苦有至徳」とある。靈根とは南朝齊の建康にある靈根寺のことで、釈法明は入蜀する前に「誦經十餘万言」といった南齊一朝を通じて誦經の善行で知られる靈根寺の名僧であつたことが知られる。

(92) 成都市文物考古工作隊・成都市文物考古研究所「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」(注(一)参照)。なお、この造像は二〇〇〇年に開催した「世界四大文明・中国文明展」に出品されたことがある。(NHKプロモーション『世界四大文明・中国文明展』図録所掲図版九九)。

〔図版出所目録〕

- 図一、文物出版社編『佛教初伝南方之路文物図録』（文物出版社刊、一九九三）。
- 図二、羅宗真・邵文良編『魏晉南北朝文化』（学林出版社、二〇〇〇）。
- 図三、『中国石窟・龍門石窟』第一卷「龍門文物保管所・北京大学考古系編、平凡社刊、一九八七」。
- 図四、王振国「龍門路洞調査報告」（『中原文物』二〇〇〇年第六期）。
- 図五、王建浩「山東濟南市神通寺殿堂遺址的清理」（『考古』、一九九六年第一期）。
- 図六、『唐』道宣『閻中創立戒壇図経並序』（『大正藏』第四五卷・諸宗部二）。
- 図七、中国芸術研究院編『中国建築芸術史』（上）（文物出版社、一九九九）。
- 図八、『中国石窟・敦煌石窟』第二卷（敦煌文物研究所編、平凡社刊、一九八一）。
- 図九、『中国美術全集』絵画編十九・石刻線画（上海人民美術出版社、一九八八）。
- 図十、祁英濤・柴沢俊「南禪寺大殿修復」（『文物』一九八〇年第十一期）。
- 図十一、同図九前掲書。
- 図十二、楊伯達『埋もれた中国石仏の研究』（東京美術、一九八五）。
- 図十三、程紀中「河北藁城縣發現一批北齊石造像」（『考古』一九八〇年第三期）。
- 図十四、山東省博興縣文物管理所「山東博興龍華寺遺址調查簡報」（『考古』一九八六年第九期）。
- 図十五、杜在忠・韓岡「山東省諸城出土の石佛像について」（『古美術』第二〇一号、三彩社、一九九二）。
- 図十六、十七、趙正強「山東廣饒佛教石造像」（『文物』一九九六年第十二期）。
- 図十八、夏名采・莊明軍「山東青州興國寺故址出土石造像」（『文物』一九九六年第五期）。
- 図十九、青州市博物館編『青州龍興寺佛教造像芸術』（山東美術出版社、一九九九）。夏名采・王瑞霞「青州龍興寺出土背屏式佛教造像分期初探」（『文物』二〇〇〇年第五期）。
- 図二十、東京国立博物館編『中国国宝展』図録（朝日新聞社、平成十二年）。

図二十一、大阪市立美術館編『中国仏教彫像』図録(朝日新聞社、一九八四)。

図二十二、『中国石窟・鞏県石窟』(河南省文物研究所編、平凡社刊、一九八三)。

図二十三、鐘曉青「響堂山石窟建築略析」(『文物』一九八二年第五期)。

図二十四、王長啓「礼泉寺遺址出土佛教造像」(『考古與文物』二〇〇〇年第二期)。

図二十五、河南省鄭州市博物館「河南滎陽大海寺出土的石刻造像」(『文物』一九八〇年第三期)。

図二十六、袁曙光「四川省博物館藏万佛寺石刻造像整理簡報」(『文物』二〇〇一年第十期)。

図二十七、張肖馬・雷玉華「成都商業街南朝石刻造像」(『文物』二〇〇一年第十期)。

図二十八、二十九、成都市文物考古工作隊・成都市文物考古研究所「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」(『文物』一

九九八年第十一期)及び『世界四大文明・中国文明展』図録(NHK、二〇〇〇)。